

文化財だより

第23号

もくじ

平成四年度文化財調査報告書	1
平成五年度文化財めぐり	8
文化財標柱・説明板設置事業	9
旧町名表示石柱設置事業	10
石巻市内所在指定文化財一覧	11
石巻市田代島の植物相と植物群落	1
諸職関係民俗文化財調査報告(1) 1. 蒲鉾	16
2. 鮑カギ作り	25
3. 菓子職人	33

石巻市教育委員会

平成四年度文化財調査報告

願王全提と石巻

I 藤 雄 一

願王全提は、長野県諏訪市湯の脇にあら臨済宗妙心寺派臨江山温泉寺の第十世住職であり、江戸時代の化政期に地蔵信仰をひろめるために、北は歐州松島瑞巌寺、南は岡山曹源寺、常榮寺まで結婚提唱、授戒説教の巡歴を行った高僧である。

▲温泉寺山門

◀願王全提像温泉寺（守谷貞治作）

一般的には、松島瑞巌寺が願王全提の足跡とされているが、石巻市には

臨済宗妙心寺派の桂林山樺昌寺をはじめとして、市内臨済宗妙心寺派の寺院を中心

に十数点あまりの願王全提関係資料の存在が確認され、さらに、最近、一関市祥雲寺においても2点確認され、願王全提の足跡が岩手県にまで及んでいること

が判明した。この調査報告は、この石巻市内に存在する願王全提の資料を紹介するとともに、願王全提と石巻とのかかわりと、宮城県を中心とした願王全提の動向をあわせて探ることを目的としたものであり、平成四年度の文化財調査の一環として行われたものである。

II



▲(廷命地蔵尊)温泉寺

願王全提は、埼玉県下岩村長兵衛の子として出生。足利の淨因寺において出家、武州芝村の長徳寺、井上の宝福寺の妙峰について修業し、妙峰の印可を受けた。さらには、温泉寺第九世の天智院のもので修業、寛政六年（一七九四）に温泉寺に住職となり、文化元年（一八〇四）に住職となっている。

願王全提については、「統領林僧宝伝」に、「目前幸に温泉の在に有り、共に五

湖四海の衆と浴す。是れより四年来鉛錫す。輪下常に數十衆に減らず。また諸方の請に応じ化を行い、殆んど虚日無し。師地蔵尊（菩薩）を崇敬することもつとも深し。因て願王と写す。或は言う。初め願王という。著記の後、玉之旁点自然に消滅す。ついに願王と称す」と紹介されている。

注・鉛錫＝神家において、学人を鍛錬すること。ケンズイと読む。

願王全提については、本山妙心寺受戒会において、尊信を受けた九條閑白家から温泉寺に贈られた銅鏡の延命地蔵尊像（九尺、二五〇貫）（写真1）を運ぶ際に、願王全提の信奉者が宿場から宿場へとリレーし、一錢の費もなく温泉寺に届いたといった逸話は広く知られているところである。

宿場の遊女達の境遇に同情した和尚は、宿場の遊女達をひどり残らず買いしましてしまった。そして遊女達を一座に集め、夜を徹して金仏を唱えさせた。はじめは和尚の奇行に笑い興じていた遊女達も、しだいに和尚の真意がわかり、その熱意にほだされて、みんなが念佛を唱えるようになった。このことが縁となって、遊女達のなかから発心して、和尚の弟子になったものがあつたという。

②、願王和尚は貢素を旨として、ふだんは素足でいた。足袋は一生のうちに一足しか用いなかつたという。寒い冬にも足袋をはかず、薄生の前でも、いつも素足であったといわれる。

願王全提は晩年、上足利の素省を後継者と定めたが早世したため、文政十一年（一八一八）に、かつて和尚が修業した、武州長徳寺から台巖大然（温泉寺第十一世）を迎えて藍寺（住職代理）としている。

願王和尚は文政十二年（一八二九）に高速の建福寺で授戒会が終り、最後の拌ををしている最中に入寂されたという。和尚の遺体は高速藩の家老が枕突峠まで見送り、高島藩からは千野家老が迎えて、二十四日に温泉寺に埋葬された。三月二十四日、足利淨因寺の実門祖良（願王全提の弟）が来山して焼香している。遺著に「願王錄全」一巻があり、嗣法者に岡山国清寺の寒山裁公と温泉寺第十一世台巖大然がいる。

石巻市内における願王全提に関する資料

所 在 地	数 量
仙寿山瑞松寺跡	築 山 1
桂林山禅昌寺	山 下 町 5
瑞 竜 庵 跡	日 和 が 丘 1
古 渡 山 廣 潤 寺	住 吉 町 1
法 巡 山 宮 駿 寺	渡 渡 町 1
南 境 元 斧 場	南 境 1
龜 井 石 材 店	井 内 1
坊 沢 山 竜 洞 寺	大 瓜 1
速 山 省 一 大	大 瓜 1
合 計	13

彦重洞院と遠山氏の拓本は同じ碑のものである。



◎第四章(1949-1956)

仙寿山瑞松寺跡と瑞竜庵跡と推定される
日和が丘一丁目木村康志氏宅の裏庭に
廟王全捷自賛による地藏尊碑が建つて
いる。碑文は元の原位置を保っているが、
ではないかと推定されるのが、瑞
松寺、瑞竜庵ともに廢寺となっているの
で、確定的なことはいえない状態である
瑞松寺跡(以下(A)と表記)瑞竜庵跡以

この賛の読み及び解釈については松島司瑞巖寺博物館学芸員塙野宗俊氏より次のようにご教示をいただいている。

千尺盤石 願王肉身の順序で読むべきなのであり、(B)に「願王自画贊」の文字が(A)と同じ箇所にあるとはいっても、(B)のみを読んだのでは、読み誤る可能性があるといわざるを得ない。

(A) 〔(A)・(B)二基の相違点は、
〔(A)には閑防印及び落款はあるが
〔(B)には見られない。〕

(B) 〔(B)には元治元歳甲子五月廿四日
「女入泰庵 諸病悉除」の願主名が
みられるが、(A)には見られない。〕

(A)・(B)に共通している質は、(A)の閑防
印の位置から判断して、左側から読み始
めるのが妥当である。すなわち、

千尺盤石 願王肉身

金環地土 梓樅化身

(A) は、
① 萬卉と思われる一業に乗った地
藏尊
額王肉身
金環時動
縱橫化身
千尺盤尺
の賛

縦横化身 その地蔵菩薩は六道四

關防印、落款のある(A)に造立年代が刻
されていないので、(B)の碑よりも古い年
代に造立されていたものとは判定できな
いが、(A)・(B)に共通する部分、すなわち



▲ 山号扁額



◀ 桂林山桜昌寺 山門



▲ 桜昌寺本堂内

贊と地藏尊像とを拓本によって重ね合わせてみると、文字、像に微妙な違いが認められるが、百パーセントに近い確率で一致するのである。したがつて(A)・(B)両碑の原図は同一人、すなわち願王全提の手による作成、といってよいと思われる。

これを石碑造立の手法とのからみからみて推定してみれば、閑防印・落款のある(A)の碑の拓本を元にして、(B)の碑の贊、地蔵尊、願王自画贊の文字が刻されたところを石碑造立の手法とのからみからみて推定してみれば、閑防印・落款のある

(2) 桂林山桜昌寺の「無畏闍」の扁額
桜昌寺本堂正面上面に「無畏闍」の扁額が掲げられている。これには「願王十二拜書」とある。「無畏闍」とは「施無畏」と同じという。

(3) 桂林山桜昌寺の山号扁額
桜昌寺山門に「桂林山」の扁額がある



▲ 地藏尊像上部の贊



▲ 地藏尊像



▲ 不動堂扁額



▲ 不動堂

願王書とある。閑防印・落款とともに思われるるのである。

(A)にはなく、(B)の右側に刻されている。

も思われる。しかし、(B)には右側に刻されている。

元治元年次甲子五月廿四日 施主櫻屋

忠助善男女等の文字及び地藏尊像の下部に刻されている「女人奉座 請像懸陰」

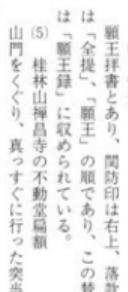
の文字は、桜昌寺の地藏尊像に刻されている願王自身による贊及び井内龜井石材店所蔵の「南無地藏大菩薩」の流れるよ

うな草書体とはまったく異なる書体であ

る。

桜昌寺本堂正面上面に「無畏闍」の扁額が掲げられている。これには「願王十二拜書」とある。「無畏闍」とは「施無畏」と同じという。

り、願王書とある。閑防印・落款とともに思われる。閑防印・落款とともに



▲ 地藏尊像

次のようにある。
願王久遠先縁 習王久遠先縁矣
昼夜毫光照 四天降指称名
和妙智無遺產

婦自安全

願王十二拜書

願王十二拜書

和妙智無遺產

無遺產婦自安全

婦自安全

(7) 古渡山廣濟寺の觀世音三界万靈碑



・高さ～60cm
・幅～107cm
・厚さ～30cm

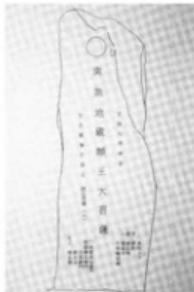
(8) 法華山宮殿寺の地藏(文字)碑



・高さ～227cm
・幅～75cm
・厚さ～110cm

東 欽喜日ニカニギニチ・仏の欽喜す

本堂右側に一際高く、そびえ立つてゐる。ボロンの閑防印は右上に、「願王書」とあり、落款は「全提」。願王の順界万靈塔としている。造立は裏面に刻された年代より、文政十年（一八二七）と判明するし、世話人は遠藤屋源七、千葉屋清之丞、渡邊屋儀蔵の三名であり、現住智誠代である。しかし、智誠については廣濟寺代々の住職には見当らない。



(9)

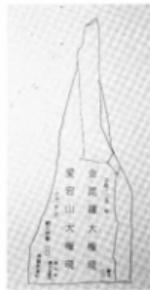
南境元舟場の金毘羅大權現碑

安心して、ひたすら坐禅を中心とした修業に勤むこと。



▶ 金毘羅大權現碑 全体
00 井内亀井石材店（亀井久兵衛氏）所蔵の「南無地藏大菩薩」の掛軸

江戸期の碑や、中世の板碑とともに建つ願王全提の行跡を考える時、常に地藏信仰と結びつけて語られるが、この碑は金毘羅大權現、愛宕山大權現を祀つてゐる異色の碑である。願王全提の民衆に対する心の広さを知らされるような気がする。



願王全提の行跡を考える時、常に地藏信仰と結びつけて語られるが、この碑は金毘羅大權現、愛宕山大權現を祀つてゐる異色の碑である。願王全提の民衆に対する心の広さを知らされるような気がする。

亀井石材店所蔵の掛軸であるが、どのような事情で伝わっているのかは不明であるという。表表は亀井久兵衛氏が行つたものであるという。ボロンの閑防印は右上に、「願王書」とあり、落款は「全提」、「願王」の順である。

以上、十点の資料は、願王全提の作と確定できるものであるが、石卷と願王全提との結びつきを確認できるものが、東京都墨田区の長命寺内に建てられている「荷塘道人圭公傳碑」の文の中にある。

る日。すなはち日十五日の安居の終った日をいふ。後世では毎月十五日を欽喜日といふ。

(5) 荷塘道人圭公傳碑
荷塘道人圭公傳碑。初名松陀。號圭主。又號荷塘道人。姓遠山氏。陸奥人。生而岐嶷。夙慧非凡。稍長。巖然若成人。不迷兒童嬉戲。好從老人長者遊。聽其話古談今。雖終夜無倦色也。人皆異之。一日隨衆遊寺。聽僧說法。自覺有省。後借人經論之。義理融通。一目即領。殆若夙悟然。從此誦經念佛。不復以人事挂念。屢棄父母求出俗。父母不許。然道心愈固。服頭陀行。久而益勤。年十七。決志出家。從石巻神昌寺住持僧至信濃。途中落彩。投東方溫泉寺願王和尚。受具得度。參究禪學。年二十二。

(後略)

△傍点は筆者△
この碑文の遠山氏の子孫は石巻市大瓜のものであるが、荷塘道人の生家、遠山氏のもともに、同じ碑の拓本が所蔵されている。

以上、十三点が石巻市内において確認されている願王全提に関する資料であるが、仙台市泉区福岡寺下二・永安寺には



次の一幅の掛軸が存在する。

② 石巻 横昌寺
懇供養塔婆銘

・祥雲寺所蔵(B) 「祥雲」の額

瑞斯施成功甲無憑合性直超人夫

石巻八重女の返歌

延まもる命あらハ

卷石に出る清水はそのままに

石巻八重女の返歌

限りなく玉より出る玉清水
朝に聞く身に解くには

石の巻吉野屋寄歌

尽す孝此の身を尽し後の世を
鳥邊の外に□□□□□

さらに、一関市祥雲寺にも願王全提の書が現存していることが確認された。

(A)・(B)ともに祥雲寺一切経蔵が文政十一年(一八二八)祥雲寺第十世應山和尚の代に完成した際に、これを祝して願王全提が揮毫したものであるという。

この祥雲寺の二点の資料は、今まで不明とされていた願王全提の生年を知らしめてくれる重要な資料となると思われる。

それは祥雲寺宝物館に収蔵されている資料(A)は祥雲寺一切経蔵が完成した文政十一年(一八二八)に書かれたものであり、これに「願王七十五抄書」とある。

これは願王全提の生年は宝曆四年(一七五四)となるのではないだろうか。

以上が現在、石巻市内及び「願王全提」さらには仙台、一関市内において確認されている願王全提関係資料であるが、これらを通じて、願王全提と石巻とのかかわりをさぐってみることにする。

願王全提とのかかわりをうかがうことができる。

△傍点は筆者△
この碑文の遠山氏の子孫は石巻市大瓜のものであるが、荷塘道人の生家、遠山氏のもともに、同じ碑の拓本が所蔵されている。

以上、十三点が石巻市内において確認されている願王全提に関する資料であるが、仙台市泉区福岡寺下二・永安寺には

① 石巻人

一 積万卷書與兄孫不學則蝕貯百千金

與兄孫不學則蝕貯百千金
免三難水劫不折者

常榮寺、北は奥州松島瑞巖寺までとされ、しかし、瑞巖寺には願王全提に関する文献は存在しないようである。しかるに、松島から北部に位置する石巻にこれまで紹介してきた十三点の関係資料



願王七十五抄書 四四

我聞是印 疾為度四生 為餘滅三者
為知有化城
無邊新發意
久遠究竟同 轉輪及遊戲

善濟極苦風

蓮華寶資 極上各流通 更依無畏力
具足不退雄

蘇雲圓院是印碑印碑南北藏裏連水借展開

慈眼力常寶齊我人夫

IV

が存在するのなぜだろうか。願王全提は石巻まで巡回してきたのであろうか。

願王全提は文政十二年（一八二九）二月二十日に、高遠建福寺で授戒会終了の拝をしている最中に没しており、行年十七才と伝えられている。（生年については前述）

石巻市における願王全提関係資料で、年代の明らかなのは、次の4点である。

(1)宮殿寺 文政七年（一八二四）

(2)廣濟寺 文政十年（一八二七）

(3)元舟場 文政十二年（一八二九）

(4)海門寺跡 元治元年（一八六四）

この4点を中心にして、願王全提と石巻とのかかわりを考えてみると、卷の出生についても不明というのが通説になっている。しかし、その入寂は文政十二年（一八二九）、二月二十日であることは明らかである。したがって、海門寺跡にある元治元年（一八六四）建立の碑は、願王全提没後三十五年も後のことになるので、願王全提が石巻に来訪しているか否かを考へる場合には除外されなくてはならない。

さらに、南境元舟場の碑は文政十二年（一八二九）十月十碑の建立であるので、この時期に願王全提が石巻を訪れていたことは到底できないので、この碑も願王全提の石巻來訪とのかかわりを証明することはできないので、除外されてもよいと思われる。

以前に造立された宮殿寺の文政七年碑、廣濟寺の文政十年碑をどのように判断したらよいのであるか。願王全提は、こ

れが存在するのなぜだろうか。願王全提は石巻まで巡回してきたのであろうか。実は生年が刻されているものではないが、前記資料で紹介したように、拝をしている最中に没しており、行年十七才と伝えられている。

石巻市には願王全提の石碑、扁額等の関係資料は存在するが、他の文書によると単純に考えてみても良いのであろうか。実は生年が刻されているものではないが、前記資料で紹介したように、拝をしている最中に没しており、行年十七才と伝えられている。

石巻市内には願王全提の石碑、扁額等の関係資料は存在するが、他の文書による記録は確認されていないので、石巻市における願王全提の足跡をより確かなものとして観察することはできない。

しかし、隣接する河北郡河北町の高橋家略系図の中に、願王全提とのかかわりを示す次のような記述がある。

△高橋才之助妻▼

室 本吉郡柳津町山形義四郎女也 夫才之助江戸へ参り候已後三十三才より獨身也 良作信一ハ文化七年八月より寺崎町江夫婦共々隠居し一子産作ハ若年と申危急之時宮殿寺、廣濟寺の造立候事、信州・

少くとも二歳、願王全提は石巻を訪れていると推定してもよいのではなかろうか。すると、願王全提入寂の五年前、二年前の来訪ということになる。しかし、七十才という高令の願王全提がはるばる信州から陸奥の石巻まで足を伸ばしてい

る温泉寺所蔵の「願王錄」全には、前に記したように、石巻に関する記述はある程度みられるのであるが、温泉寺からのご教示によれば、石巻と願王全提との年代的なかかわりは不詳ということである。

十五才という高令の願王全提がはるばる信州から陸奥の石巻まで足を伸ばしてい

る温泉寺所蔵の「願王錄」全には、前に記したように、石巻に関する記述はある程度みられるのであるが、温泉寺から

この高橋家略系図の中の高橋才之助妻の実名は何といつたのであろうか。もし

かしたら「願王錄」にある、前掲の「石巻八重女」ではないのだろうかと、彼女の実名は山形義一郎氏の孫子「現津山町山形喜久氏」に照合したところ、

以上は、全国の行脚に出掛けて行っているが、それが本名は見えず、

山形家の略系図にも彼女の本名は見えず、

さらに河北町合戦谷の高橋家の墓地において彼女の墓碑を確認し、実名を探つてみたのであるが、法名の「日峯軒義山智

江戸期の温泉寺宗妙心派の高僧願王全提と石巻とのかかわりは、どのような因縁によるものであろうか。石巻における願王全提の布教の拠点は神昌寺であることはほぼ間違いないと思われる所以である。

保春院、覺範寺、天皇寺、東昌院といつた仙台市を中心とした臨濟宗妙心寺派、東福寺派の寺院名を垣間みることができるので、これら寺院と廟王全提とのかかわりを解明することによつて、石巻と廟王全提とのかかわりも、より鮮明に判明するようになるのではないか。今後の課題である。

(参考文献)

- ・ 諏訪の名刹 臨濟宗妙心寺派
- ・ 桃生郡河北町 高橋家略系図
- ・ 守屋貞治の石仏・野ざらしの芸術
- ・ (井上清司写真集)
- ・ 車我室遺稿 卷三
- 教示をいたなつた方々(敬称略)
 - ・ 堀野宗俊(瑞巌寺博物館)
 - ・ 滝 元悟(諏訪市温泉寺)

- ・ 春日太郎(長野県高遠町)
- ・ 小松光衛(長野県伊那市)
- ・ 立花京子(東京都)
- ・ 祥雲寺(一関市)
- ・ 大矢元康(仙台市水安寺)
- ・ 桂田文隆(石巻市揮昌寺)
- ・ 斎渡惠啓(石巻市廣濟寺)
- ・ 永松隆賢(石巻市宮殿寺)
- ・ 坊沢敏和(石巻市竜洞院)
- ・ 亀井久兵衛(石巻市)
- ・ 遠山省一(石巻市)
- ・ 木村康志(石巻市)
- ・ 高橋精一(石巻市)

平成五年度文化財めぐり

第三回文化財めぐり

近世の石仏をたずねて — 門脇地区の石造物 —

平成五年度の文化財めぐりは、第一回は中新田・大和方面、第二回福島県福島市、第三回市内門脇地区で実施しました。

おかげさまをもちまして、参加された方々からも御好評を得ることができます。

本年も受付の方法を抽選にさせていた
だきました。例年どおりたくさんのご応
募をいただきましたが、残念ながら参加
できなかつた方々が多数ございましたこ
とを深くお詫び申し上げます。

第一回文化財めぐり

中新田・大和の文化財をたずねて

月 日 十月三十一日（日）

講 師 石垣 宏石巻市文化財保護委員
参 加 者 四十三人

この日は、阿武隈川流域の福島市とそ

の周辺の文化財を見学しました。

見学当日は、まずまずの天気で、朝八

時に石巻市役所の玄間に集合し、観光バ

スで東北自動車道の大和インターチェン

ジから福島飯坂インターチェンジへと抜

け、はじめに医王寺を見学しました。

昼食後、古蘭裕而記念館、知照觀音、

旧伊達郡役所を見学、夕方石巻へ帰りました。

今日は、まずは天候に恵まれ、マ

イクロバスで、朝九時に市役所前を出発

し、中新田に十時過ぎ到着し、東北陶磁

文化館・繩文芸術館を見学しました。あ

ゆの里物産館で昼食、バッハホールを見

学しました。午後は、大衡村の昭和万葉の森、大和町の原阿佐緒記念館、伊達御廟を見学して、石巻に戻りました。

途中、何個所かでみやげ品を買うことができ、また、石巻からそんなに遠くな
いが、あまり来る機会がないところの文

化財をみることができ、参加者の評判も上々でした。

第二回文化財めぐり

信夫の郷をたずねて

月 日 十月三十一日（日）

講 師 佐藤雄一石巻市文化財保護委員
参 加 者 二十八人

晴れてはいても、十一月の肌寒い日でした。が、朝九時に二十四人の見学者が皆元気に石巻市役所前を歩いて出発しました。

海門寺跡から瑞龍庵、日和山、西光寺、稱法寺、圓松堂、船魂神社のコースをめぐりました。

歩いて日和山を越え、午前中いつぱい立ちどおりでしたが、落伍者もなく、無事に見学を終えることができました。

石巻市の中心部には、知られていない数々の石造りの文化財があり、前年の石

柱・住吉地区同様、普段気づかない文化財について、講師の説明を受け、参加者は新たな発見に皆感動していましたよ

うでした。あまり行く機会がない隣県の文化

財を見学することができ、参加者から好評をいたしました。

◀ 第二回文化財めぐり



▼第一回文化財めぐり



◀ 第三回文化財めぐり

旧町名表示石柱設置事業

由緒ある町名を後世に

昭和三十七年に「住居表示に関する法

律」が制定されてから、昔からの由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、古い町名はその住民からも忘れられてしまう状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私たちの祖先がその土地とどのようにかかわってきたかを知る重要ながかりであり、かけがえのない文化財です。

今、日本各地では、町名も文化財であるという認識に立ち、由緒ある町名を何らかの形で保存する運動が起きつつあります。石巻市教育委員会では、すでに使われなくなつた由緒ある町名を後世に伝えるため、古い町名とその由来を石に刻んで建立する事業を昭和五十六年度から行っています。本年度は二つの石柱を設置いたしました。

設置にご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

町 裏

この地一帯は、石巻市内最大の板碑密集地帯であり、また、古代の薬手刀（わらびてとう）が出土した遺跡がある地域である。このように湊村は、古代から世上にかけて生活の場として早くから開発されていたが、江戸時代になると江戸廻米のための米蔵が設けられるなど一層の

にぎわいを見せるようになった。「町裏」とは、この湊村の中心であった本町・南町の裏手にある地区という意味で名付けられた地名であると思われ、江戸時代後期の記録にもすでにあらわれている。

海門寺前

宝永六年（一七〇九）に仙台大年寺第四世風山和尚によって創建された黄檗宗（おうばくしゅう）の寺院「好日山海門寺」は、仙台伊達家の信仰もあつく、その盂蘭盆会（うらはんえ）は、「夜づての火門寺」といわれるほどにぎわいであった。しかし、明治六年（一八七三）の火災で建物の大半を焼失し、現在は薈堂跡や戒壇石が、その往時をしのばせるものとして残っている。この海門寺の門前一帯を「海門寺前」と称していた。



石巻市内所在指定文化財一覧

(平成5年3月現在)

<国指定文化財>

名 称	員 数	指 定 年 月 日	所 在 地	所 有 者	時 代
重要文化財 岩版	1	昭 36.2.1	石巻市住吉町一丁目8-29	毛 利 伸	繩 文
史跡 沼津貝塚	1	昭 47.10.21	石巻市沼津字出外		繩文～弥生

<県指定文化財>

名 称	員 数	指 定 年 月 日	所 在 地	所 有 者	時 代
牡鹿法印神楽	1	昭 46.3.2	石巻市湊字牧山1-1	(代 表) 桜谷守雄	近 世
仁斗田貝塚	1	昭 50.4.30	石巻市大字田代浜字仁斗田		繩 文
鳥屋神社奉納絵馬 『奥州石巻ノ図』	1	昭 63.11.29	石巻市羽黒町一丁目7-1	鳥屋神社	近 世

<市指定文化財>

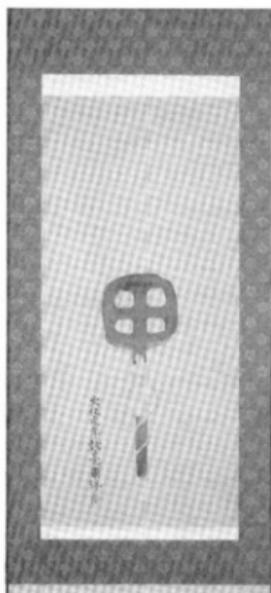
名 称	員 数	指 定 年 月 日	所 在 地	所 有 者	時 代
多福院板碑群	88	昭 50.6.1	石巻市吉野町一丁目1-9	多 福 院	中 世
平塚ツナ家文書	739	(第1次) 昭 51.6.1 (第2次) 昭 53.4.1	石巻市南浜町一丁目7-30	石 巷 市	近 世
旧石巻ハリストス正教会教会堂	1	昭 55.12.20	石巻市中瀬3-18	石 巷 市	近 代
潮 音	1	昭 55.12.20	石巻市南浜町一丁目7-30	石 巷 市	現 代
イチヨウ(吉祥寺)	2	昭 55.12.20	石巻市高木字寺前48	吉 祥 寺	
イチヨウ(龍泉院)	1	昭 55.12.20	石巻市水沼字天似113	龍 泉 院	
葛 西 梶	3	昭 56.5.18	石巻市大瓜字棚橋168	龍 洞 院	中 世
黒 潮 開 目	1	昭 56.5.18	石巻市南浜町一丁目7-30	石 巷 市	現 代
石巻市渡波獅子風流	1	昭 56.12.19	石巻市渡波字西ヶ崎11	(代 表) 阿部慶志	
漁 夫 像	1	昭 57.12.15	石巻市南浜町一丁目7-30	石 巷 市	現 代
宝 振 印 塔	1	昭 61.12.1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	
相 輪 塔	1	昭 61.12.1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	
零羊崎神社奉納絵馬(白馬の図)	1	昭 61.12.1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	
零羊崎神社奉納絵馬(黒馬の図)	1	昭 61.12.1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	
長 指 寺「編額」	1	昭 61.12.1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	
銅造菩薩立像	1	平 元 7.31	石巻市渡波字仁田山2	洞 源 院	古 代
銅造薬師如来立像	1	平 元 7.31	石巻市高木字竹下75	日 野 孝 栄	中 世
銅造阿弥陀如来立像	1	平 元 7.31	石巻市高木字竹下75	日 野 孝 栄	中 世
銅造觀音菩薩立像	1	平 元 7.31	石巻市高木字竹下75	日 野 孝 栄	中 世
木造觀音菩薩坐像	1	平 元 7.31	石巻市羽黒町一丁目1-27	永 巖 寺	古 代・中 世
木造薬師如來坐像	1	平 元 7.31	石巻市真野字萱原2	長 谷 寺	中 世
渡波塙田つば打ち娘	1	平 4.6.1	石巻市留宿赤坂前7-1	阿 部 亀 雄	



▲印ばんてん（その1）



▲（その2）



▲甲子さまの掛軸



▲茅木稻荷社

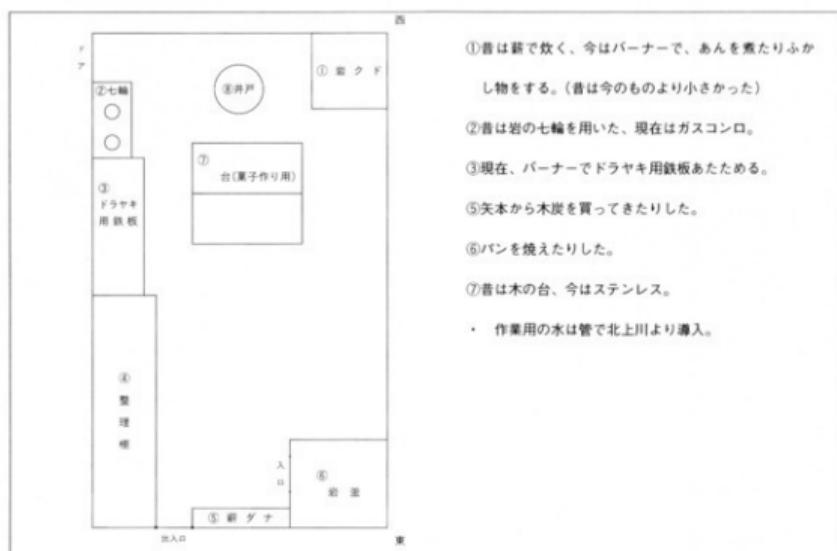
7	技術修得過程	職能分担過程	同業者の組織
職人 の 職能 組 織	<p>・徒弟修業時代</p> <p>1. 周間…小学校卒業（12、13才）から徴兵検査（20、21才）まで。</p> <p>2. a 最初は雑布かけなどの掃除、配達、材料の目方測り、運搬…</p> <p>…したまわりの仕事。</p> <p>b 次に職人について作り方を会得。</p> <p>（「盗んで覚える」）</p> <p>・職人</p> <p>1. 他所から来た職人（30、35才）は住み込みで働き、月給をもらう。地本の職人は家から通う。</p> <p>2. 妻帯して「のれんわけ」をする。（芳生堂は芳春軒笠屋の芳の一宇をもらって、「のれんわけ」をした。</p> <p>「のれんわけ」をする時、道具など一切くれてやる。）</p>	<p>・仕事したまわり</p> <p>材料の目方測り、材料の運搬</p> <p>・作製</p>	<p>・三代目、新右衛門の時、宮城県菓子組合の理事になる。</p> <p>・昭15、16年頃、戦時中、若い職人が軍隊や徴用で軍事関係の仕事に従事させられたので、残った店主（石巻、渡波、女川）があつまり、ムツミ製菓有限会社を設立し、工場で菓子を作った。社長は二代目、市之助。</p>

8	衣食住生活	年中行事・生産暦	信仰儀礼・禁忌伝承	符丁・教え方など	仕事歌
職人 の 生 活	<p>1. 食</p> <p>奉公人も家族と一緒に食事をした。</p> <p>2. 住</p> <p>奉公人（5～6人）、二階八疊間で生活していた。</p> <p>3. 衣</p> <p>布とんは全部支給。盆、正月には新しい着物、作業衣を買ってやった。</p> <p>4. 小遣</p> <p>盆、正月に支給。</p>	<p>1. 正月</p> <p>①大晦日</p> <p>勘定取りが終了してから年こしそば食べた（皆一緒に）。</p> <p>②正月</p> <p>・寝る前に寒いので湯餅を食べさせ眠らせた。</p> <p>・2、3日奉公人を帰宅、帰郷させた。</p> <p>2. 盆</p> <p>16日 休み</p> <p>3. えびす講</p> <p>・奉公人に新しい足袋、羽織などを与え、休み日とし、御馳走つくり振舞う。</p>	<p>1. 甲子さま</p> <p>2ヶ月に1回、甲子さまの掛け軸をかけ、味つけ御飯を炊き、あけ打み、その後、職人、奉公人に振舞う。</p> <p>2. 茶木稻荷</p> <p>（内神の祭り）…初午の日、茶木稻荷のお堂に旗をかかげ、神主をよんで赤瓶をあげておがむ。この日は休み日である。</p>		

注……茶木稻荷社は東京市ヶ谷の地主神で眼病に効くというので、幕末に大いに賑わった神である。

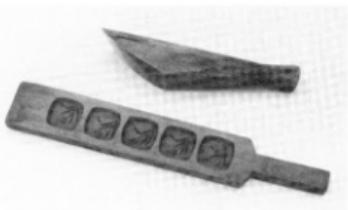
くわしくは・ちくま学芸文庫—『江戸のはやり神』P54、55（「願かけ禁忌」）。P160、161（「江戸神仏願掛重宝記から」）。P192、193（流行神としの稻荷）、参照。
 • 『古事類苑』—「神祇部31」—雑祭—参照。

5. 製作・加工施設

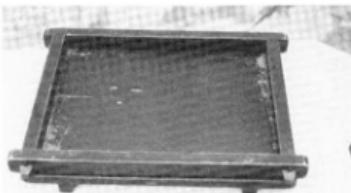


- ①昔は薪で炊く、今はバーナーで、あんを煮たりふかし物をする。(昔は今のものより小さかった)
- ②昔は岩の七輪を用いた、現在はガスコンロ。
- ③現在、バーナーでドラヤキ用鉄板あたためる。
- ④矢本から木炭を買ってきたりした。
- ⑤パンを焼えたりした。
- ⑥昔は木の台、今はステンレス。
- ・作業用の水は管で北上川より導入。

6	種類	名称	用途	年間総生産量	取扱保管、商團、販売方法、決済方法など
製	・和菓子	・「元祖笠屋もなか」(最初はシャミセン型) ・ようかん(栗ようかんむしようかん)	御進物用(現在) ・明治初期のモナカは客の注文に応じて、モナカの皮(餅皮)を焼いてアンを入れて売る。合せると皮がねばるので。 ・現在のようなモナカは松泉堂が改良。		
	・落雁	越雪	・御進物用 ・客用 ・法事・祝儀用		
品		麦落雁(こうせん落雁)	・普段用 ・お客様用		
	・前餅	・まき前餅(昔は本当の白い餅を敷いてなかに入れてまく) ・かわら前餅	・お客様用		
	・飴	・たんきり飴 ・水晶玉、黒玉 ・らっきょう飴	・駄菓子・普段用		
	・ゆべし	・福ゆべし	・客用(今はおつかい用)		



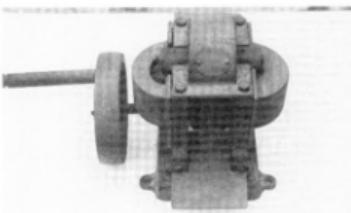
▲ 麦落雁の型と押し板



▲ 落雁の型



▲ パン型（赤瓶を入れる）



▲ 鈴切り器械



上…こうせんをならべ

乾燥させる台

下…調理台



▲ 赤ナベ（あんをとる）

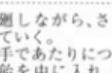
とへら（あんをねり合せる）



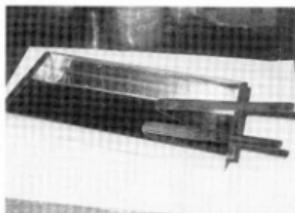
▲ 焼き菓子を作る釜（電気でやく）



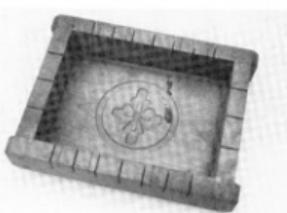
▲ かまとと釜（あんを煮たり、餅頭をふかす）

	製作・加工の工程(細分の工程に留意)	具体的な用具名	用具の使い方・変遷・個人的工夫など
製作	1. 麦落雁 1. 上南にコウセンを4:6の割合で混入。 2. 型をとり 3. 電気釜に入れて乾燥する。 -前餅	木型(麦落雁用)、ヘラワク	
加工	1. 原料の小麦粉に卵や砂糖を配合し、ねって水を入れる。 2. 水を切って型に流し込み。	鉄の型	
の工 程	3. 烤上げる -餡(タンキリ餡)	鉄の型	
用具	1. 水飴をボールに入れて砂糖をまぜて水を入れる。 2. バーナーで煮こむ。 3. 油を敷いたナベにあけ。	ナベ	
	4. 手で持てる位にさめたら、餡びき機にかけてのばし、のばしではかけ空気を入れる。 5. 適当なふとさにして、包丁・ひも・機械などで切断する。	餡びき機 出刃包丁、ひも、機械	 油ナベ  選しながら、さましていく。 手あたりについた餡を中に入れ、平均にさましていく。
	6. ゆべし 1. ナベにゆべし種と砂とう、くろみ、しょう油を入れて火にかけちょっとにつめる。 2. セイロのわくに布巾をかぶせ、それに流しこみ、1時間程ふかす。 3. さまして、適当の大きさに切る。	ナベ セイロ	

4. 製作加工の用具



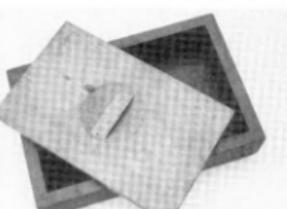
▲ステンレスバット(あん・カンテンを入れる)と竹べら(あんをつめこむ)



▲落雁の型(越雪用)



▲今のもなかの皮ともなかの型
(明治後期~大正時代)



▲落雁のおしふたと落雁の型の底

2	原 材 料 の 名 称	原 材 料 の 入 手 方 法・経 路 な ど	保 存 状 況 そ の 他
素 材 (主 た る 素 材)	<ul style="list-style-type: none"> ・最中 <ol style="list-style-type: none"> 1. 皮…昔は餅米、現在はモチコ(餅粉) 2. あん…小豆、砂糖、水飴、カントン ・落雁 <ol style="list-style-type: none"> 1. 餅米の粉 (ラクガン種) 2. あん 3. 砂糖 4. 水飴 	<ul style="list-style-type: none"> ・皮は昔は自分の家の田からとれた餅米を捣いてたものを用いた。したがってふたを合せるとねばるので注文に応じてその場であんを入れて売った。 ・その後、粉にひくようになってから皮屋に餅米をもっていってひいてもらった。 ・現在は仙台からモチコを購入している。 ・モチコよりもざらしてあらい粉 (上南=ラクガン種) 現在は仙台タカタケより購入している。 	
素 材 (そ の 他)	<ul style="list-style-type: none"> ・前餅 <ol style="list-style-type: none"> 1. 小麦粉、砂糖、飴 2. 飴 <ol style="list-style-type: none"> 1. 砂糖と水飴 2. ゆべし <ol style="list-style-type: none"> 1. 昔はモチコ、小麦粉、砂糖、しょう油、くるみ 2. 今はユベシ糖、砂糖、しょう油、くるみ 	<ul style="list-style-type: none"> ・小麦粉は昔は日本産、今は外国産を用いている。 ・水飴は餅米から自分の家でつくる。今は東京からサラシ水飴を購入している。 	

3	製 作・加 工 の 工 程(細 分 の 工 程 に 留 意)	具 体 的 用 具 名	用 具 の 使 い 方・変 遷・個 人 的 工 夫 な ど
	<ul style="list-style-type: none"> ・最中 (もなか) <ol style="list-style-type: none"> 1. 皮…餅を焼いてつくる 〔今は専門の皮屋に注文 (桃生 郡桃生町神取勝力殿中皮屋)〕 		
製 作	<ul style="list-style-type: none"> 2. あん <ol style="list-style-type: none"> a ツブシあん <ol style="list-style-type: none"> ①北海道産小豆を1晩水洗い ②弱火で豆をつぶさないように1時間位煮る。 <ol style="list-style-type: none"> ③それに白ザラメを入れて1晩中おく。 <ol style="list-style-type: none"> b コシあん 		
・ 加 工 の 工 程	<ul style="list-style-type: none"> ①水洗い ②煮る ③フルイで皮をとり、豆をつぶして中のゴウをとって布でしほる。皮をすべて中の沈殿物をとる。 (今はコシあんは専門のあん こ屋 (門脇一丁目の中川あん屋) に注文する。ツブシあんは自分の家でつくる。) <ol style="list-style-type: none"> c 最中のあんの製作。 		
程 ・ 用 具	<ul style="list-style-type: none"> ①ツブシあんにコシあん、白ザラメを混入し、赤銅なべに入れて、かき廻しながら煮つめる。 ②別な用器でカントンを煮ておく。 ③①のものに②のものを入れる。 ④最後に水飴を入れる。 	サワリ	
	3. 皮にあんを入れる。 ・落雁 (越雪)	竹べら	
	<ul style="list-style-type: none"> 1. サワリに砂糖を入れ、それに水とげした水飴を入れて手でまぜる。次にラクガンの種 (上南…餅) を入れて手で10分位手早くもむ。 2. 本型に入れておしかためる。 	サワリ 本型	

3. 菓子職人

調査期間	平成4年 9月5日～ 10月5日	調査地	宮城県石巻市本町42番地	職種(技術)名	菓子職人
話者	長鶴よし 誠一(72才) (48才)	性別	女 男	生年	大正9年10月30日生 昭和19年6月11日生
技術伝承者(従事者)の呼称	(通称)	菓子職人	(家名・屋号)	芳春軒笠屋	(その他)
1	地域的特色			技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯	
総観 (調査地 ・職種 (技術 等)	<p>江戸時代、石巻は陸前北部の町方として、周辺浜方、陸方の政治、経済、文化の中心として栄えて来た。明治になって、明治2年…石巻商社発足。明治14年…週漁業岩手組創設。北上運河開通、三菱汽船会社石巻支店の設置。明治17年…第七十七国立銀行石巻支店開設。牡鹿、桃生、本吉三郡連合水産強共進会開催。明治18年…日本郵船会社は石巻支店を建築。19年…石巻物産会社創設。21年…府九県水産共進会を中止して開催。</p> <p>上記のように商社、銀行、海運会社が石巻に進出し、石巻は宮城県の商業、流通の中核都市として繁榮した。他県から商船に乗って港に着く人、農村から買い物に来る人、新しいニーズを求めて人々は街に殺到した。食品業界もこれらの人々のニーズに答えるために、新しい食品物の改良に励んだ。名物笠屋の錦梅(「元祖笠屋モナカ」)もその一つである。大正時代の手鞠歌にも「もっちょい本街笠屋のもなか」と唄われた有名店であった。</p>			<p>笠屋菓子店の創業は明治7年である。曾祖父は相州浦賀の人である。維新の当時、同郷の笠屋某という廻米問屋が石巻に来て手広く取引を営んでいた。その支配人として雇われていたのが曾祖父である。曾祖父、幸蔵は、同店から身を引くと、本町河岸に菓子商店を開業した。そして主家の笠屋の商号を冠した。</p> <p>幸蔵は「錦梅」という今日の最中の元祖を作り名聲を博した。それをさらに改良したのが松泉堂最中である。</p> <p>笠屋の最中と五色餡は各地共進会、品評会で名物菓子として入賞している。 (参考)</p> <p>幸蔵→市之助→新右衛門→誠一、現在は四代目である。昭和5年の国勢調査によれば職人…1人、雇人…4人、主人と計6人で菓子業を営んでいた。</p>	
製作・加工の概要	3の製作・加工の工程の項を参照				



▲右から二人目、
市之助氏
(昭和2年の笠屋)



9	技術伝承上の問題点	用具類等の収集・保存の実態・可能性	諸職関係資料（史料を含む）の概要
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> 「喜助カギ」「④のカギ」「鮫浦のもの」として宮城、岩手、青森までも漁家の間に名が通っている良品を生産したが、近年鮭の減少、密漁の増加など、漁家のアワビ資源への依存度が低下し、アワビカギ業の仕事も先細りしこの職人も他の職人と同様、今の代で伝承者がなくなるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在も製作しているので用具への保存はできるが、収集は見通しがない。 	<ul style="list-style-type: none"> 父、喜助が各浜のカギの図面を記録したノート（2冊）。
従来の主要参考文献			
<ul style="list-style-type: none"> 『宮城県の諸職』1990 —東北歴史資料館 『牡鹿町誌』上巻 			

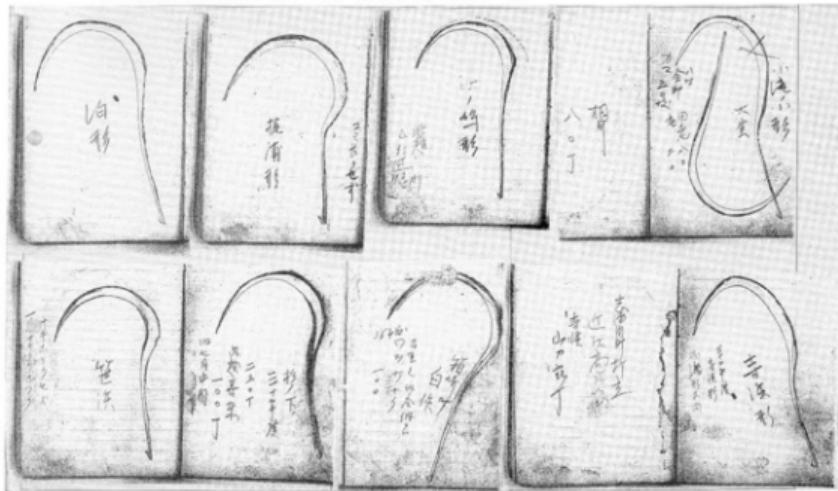
7	技術修得過程	職能分担過程	同業者の組織
職 人 の 職 能 ・ 組 織	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父は石巻市渡波出身の鍛冶屋で、鮫浦で開業し鍬・鎌や広瀬川の砂利すくいの道具などを作っていた。 父は小さい頃から祖父の手伝をしていた。父は15才の時、将来に不安を感じ、家を出て岩手県大船渡のアワビカギ専門の鍛冶屋に弟子入りし、2年間でその技術を修得した。(祖父のもとで小さい頃から仕事を手伝っていたので2年で修得した) ・末子の忠喜は石巻工業高校を卒業すると東京に3年間就職した。父の呼びもどして家業を継いだ。21才から現在まで父の仕事を見よう見まねでアワビカギ作りの技術を習得した。 ・父は岩手、宮城各浜で以前に使用されたアワビカギの図面をノートにとり注文に応じた。大正14年(1925)より日本刀と同じ手法で製作されたその品質は銳利、強韧である。 	塗装は妻が分担している。	<ul style="list-style-type: none"> ・15年前、価格の一定をかかるために岩手、宮城の鍛冶屋で三陸沿岸鮫鈎製造組合(事務所は岩手県綾里町)を結成した。県内では現在、気仙沼市松岩の長山氏と二人だけ組合に登録している。

8	衣食住生活	年中行事・生産暦	信仰儀礼・禁忌伝承	符丁・教え方など	仕事歌
職 人 の 生 活	<ul style="list-style-type: none"> ・他の漁民とかわらない。 ・鮫カギの製作だけで生活できないので、養殖業に使用する鉄具や他の漁具を製作し、また漁業と兼業である 	<ul style="list-style-type: none"> ・かせぎ初め 正月2日、早朝にホドヘ火入れを行い、小さい模型を作って神棚に供える。 ・ふいご祭り 11月8日、一揃の鮫カギの模型を作って神棚に供え、早朝赤飯を炊いて御神酒をあげて、注連縄をはって一年の無事故と家業の繁昌を祈る。赤飯は近所にも配る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出産、死亡の時は「火が近かい」と言って、家の出入りや、仕事もしないし、神社にもあがらない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホド・炉 ・カギ1個を1丁と数える。 	なし



▲ 作業場にある神棚

<阿部善助氏のアタビカギ注文手帳より>



価 格 表

平成4年1月10日改正

品名	寸法	小売単価	品名	寸法	小売単価
鮑 鈎		1,500	ステンレス ウニタモ輪	5ミリ 9寸	3,300
鮑 鈎 特 大		1,800	ステンレス ウニタモ輪	6ミリ 9寸	3,500
鮑 鈎 先 掛		800	ステンレス ウニタモ輪	6ミリ 1尺	3,800
カキムキ小刀 柄 付		1,450	ステンレス ウニタモ輪	7ミリ1寸	4,800
二 本 鈎 小 型		2,000	ステンレス ウニタモ輪	7ミリ2寸	5,000
二 本 鈎 中 型		2,100	若 布 錐	8 寸	2,700
二 本 鈎 大 型		2,200	若 布 錐	9 寸	3,000
三 本 鈎 小 型		2,700	若 布 錐	1 尺	3,400
三 本 鈎 中 型		2,900	若 布 錐	1尺1寸	3,700
三 本 鈎 大 型		3,100	(平)三本ヤス		6,500
ステンレス ウニタモ輪	5ミリ 6寸	2,800	(平)四本ヤス		7,500
ステンレス ウニタモ輪	5ミリ 7寸	2,700	(平)三本ヤス	13ミリ	7,500
ステンレス ウニタモ輪	5ミリ 8寸	2,800	(平)四本ヤス	13ミリ	8,500

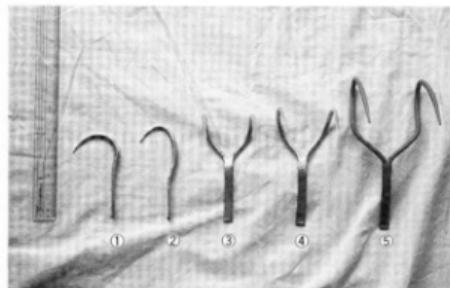
消費者の皆様へ

※同組合員の製品はクダリ物と違い（手打製品）です。

※尚品物がござられた場合の交換は致しません。

三陸沿岸鮑鈎製造組合

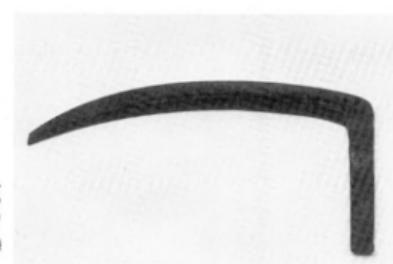
6	種類	名称	用途	年間総生産量	収納保管、商團、販売方法、決済方法など
製品	・鮑カギ	丸型アワビカギ (小洞型)	小型で浅海用鮑採取に使用		・最盛期は北は青森県八戸市から南は鳴瀬町宮戸まで。現在は牡鹿町、北上町、志津川町、歌津町だけに縮少している。 ・出荷は9月に行い、各漁協単位に県内は配達し、県外は運送した。
		丸型アワビカギ (泊型)	やや大型で深い荒海での鮑採取に使用	・最盛期は 7000丁 ～8000丁	・集金は12月に行い、同時に翌年度の予約注文をうける。
		田老型アワビカギ	岩の割れ目などにいるアワビを採取するのによいと言われている。(岩手県、近くでは十三浜)	・1500丁位 で年によつて差がある (10年前) (1日50丁)	
ヤス	平ヤス (三本ヤス・四本 ヤス・八本ヤス ・十本ヤス・十 二本ヤス・十四 本ヤス)		小網から大(深縄つき網)		
ウニカギ ホタテカギ	二本鉤 三本鉤	十三浜から北(大) 鯨浦沿岸(小)			
カキムキ ウニムキ カマ ウニタモ	カキムキ小刀 ウニムキ小刀 若布鎌 ウニタモ輪				



①— 丸型(泊型)
 ②— 田老型
 ③— ウニカギ(二本鉤)
 ④— ホタテカギ
 ⑤— ウニタモ

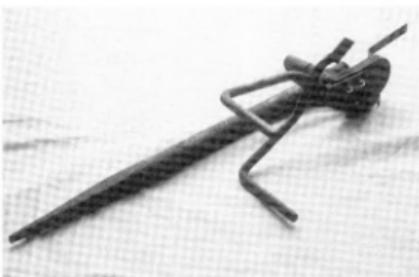


▲ウニタモ輪(8寸)とウニムキ





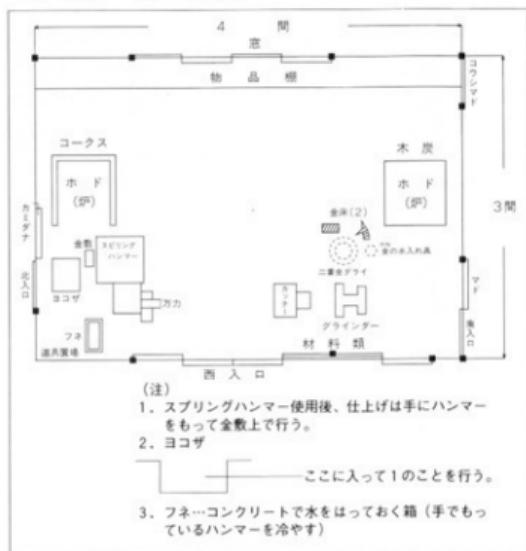
▲ 金床（ピッケル型）

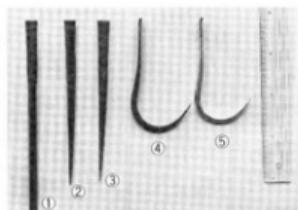


▲ 自作成型工具（金具をはさむ）

(注…3の製作工程とその写真参照)

5. 製作・加工施設





◆鍔カギ成型順次

- ① 丸棒（コミの部分を最初に彎いてのばす）
- ② | 1丁分の長さに切断し、先端を彎いてのばしグラインダーで鋸利に削る
- ③ | 「トリグチ」に成型、焼入れ、焼きもどし、刻印
- ④ 「トリグチ」に成型、焼入れ、焼きもどし、刻印
- ⑤ 銀ペンキを塗って完成



▲スプリングハンマーで延ばす



▲自作成型工具にはさんでまげる



▲焼き入れ（二重全ドライを用いる）

4. 製作加工の道具



①電動送風器 ②やっとこ
③タガネ ④ホド(炉)(コーカス)



スプリングハンマーで延ばす



↑
万力
全敷（全床）



①ホド（炉）（木度）
②グラインダー

(注…5の加工施設図参照)

2	原 材 料 の 名 称	原 材 料 の 入 手 方 法・ 経 路 な ど	保 存 状 況 そ の 他
素材 (主たる素材)	炭素鋼の棒鋼(丸棒)	以前は東京都江戸川区の鉄鋼社から1~3tとまとめて購入していた。 ・鮑資源が減少した現在では、アワビカギを毎年新調している漁家も古いアワビカギを使用するようになったので注文数も少くなり、トン単位のまとまった数量でないと送ってくれない、東京からの仕入れを諂ひめ石巻の専門店から必要量だけ購入している。	・予約製作のため余分の材料は持て居ない。 ・完成品も工場内に置いている。
素材 (その他)	木炭 コークス 塗料	・木炭は2~3年分、まとめて本吉郡志津川口戸倉から購入していた。 ・コークス・銀ベンキは石巻から購入。	

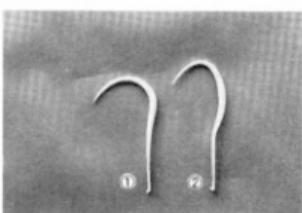
3	製作・加工の工程(細分の工程に留意)	具 体 的 用 具 名	用 具 の 使 い 方・ 変 迤・ 個 人 的 工 夫 な ど
鮑 カギ の 製 作 ・ 加 工 の 工 程 ・ 用 具	1. 切断 丸棒を手に持ちやすい長さ(6寸) …約1mにヤスリで印をつけてから電気カッターで切断する。	電気カッター、ヤスリ	昔はタガネで叩いて切断した。
	2. 压延 ホド(如)でコークスで熱し、ハンマーで叩いて延ばす。	電動送風器(昔はフイゴ)、スプリングハンマー、やっこ、仕上げは金床(金床)	昔はフイゴを使って加熱し、2人で向いあってハンマーで叩いて圧延した。 1000℃に熱する。
	3. 切断 1寸分(3寸3分=10cm)の長さにタガネで叩いて切断する。	タガネ、金床	①コミの部分を最初に叩く。 ②切りつけた所を(3寸3分の線)を(ホドで赤くなったの)をタガネで叩いて切断する。
	4. 先端の成型 ①先端の部分をハンマーで叩いて延ばす。 ②グライダーで先端を銳利に削る。	ハンマー、電気グラインダー	・昔はヤスリで削って銳利に仕上げた。
	③木炭を用いたホドで焼いて、金床にのせ、叩きながらカギの形に丸める。	電動送風器 やっこ、金床(ピッケル型) 型見本、自作成型工具(はさみ)	・昔はフイゴで風を送る。 ・木炭を用いるのは微調整ができるからである。
	5. 烧入れ 再び熱したもので二重の金ダライで温度を定温に保った水に入れてヤキを入れる。	金ダライ…大小二個 バケツ(子備水入れ) やっこ、ひしゃく	・今は型見本を用いるが昔はカンで「トリゲナ」に仕上げた。 ・はさんでまげる自作成型工具を用いる。(現在)
	6. 焼きもどし 焼き入れそのままでは使用できない…折れるので、材料に「ねぼり」を与えるために焼きもどす。カギを※ある温度に一寸熱して(炭の上で)、次に水を入れる。(これでカギは折れにくいかどうかがわかる)	かねの水入れ(鉄桶)	油(熟したカギを油(秘伝)に入れて焼き入れる) 冷やす水※次頁写真参考
	7. 刻印	やっさ →焼パン	・カギ(鉄)が温度が変化すると色も変わる。 青→むらさき→だいだい→赤と変って行く、その時のある(秘伝)色を見てさっと、水を入れる。
	8. 漆装 銀ベンキを塗って完成する。	電気スプレー(銀色のベンキ)	・昔は油をしみこませた布でふく。 漆装は晴天の時、妻にまかせた。 ・1日8時間、急いで50分は仕上げる。

2. 鮑カギ作り

調査期間	平成4年 6月15日～ 6月20日	調査地	宮城県牡鹿郡牡鹿町大字鮫浦	職種(技術)名	鮑カギ作り
話者	阿部忠喜(44才) 男 昭和24年12月3日生				
技術伝承者(従事者)の呼称	(通称)	鍛冶職人	(家名・屋号) ④ (⑨)	(その他)	
1	地域的特色			技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯	
総観	<p>鮫浦はリアス式海岸の典型である牡鹿半島の東岸に位置する漁村である。鮑の食料になる紅藻類、褐藻類が岩が多く繁茂し、沿岸は鮑の生育に好条件の自然環境である。</p> <p>(調査地) 江戸、明治時代、牡鹿半島の特産物として、干鮑、灰鮑に加工され、長崎依存として中国に輸出され、漁家の重要な資源として生活を支えてきた。その後、需要の変化に伴い、生物として出荷され珍重されてきた。しかし、現在、資源の減少と密漁に伴い鮑の生産量は減少している。</p>			<p>鮑カギには牡鹿で用いられている丸型(小瀬浜型と泊型)と本吉郡から岩手県にかけて用いられている田老型の二種類がある。</p> <p>父、喜助は小さい頃から祖父の野鍛冶を手伝っていたが、15才の時、将来に不安を感じ、家を出て岩手県大船渡のアワビカギ専門の鍛冶屋に弟子入りし、2年間で、その技術を修得した。各人、各浜でカギの形が微妙にちがうので各人、各浜で使用したカギの形をノートに図面をとり、注文に応じた。大正14年(1925)より日本刀と同じ手法で製作されたその品質は頗る銘利、強弱なことで評判で、「アワビカギ」と言えば「喜助鍛冶のもの」「鮫浦のもの」といわれ、北は八戸から南は鳴瀬まで販路を広げた。</p> <p>最盛期の年間の総生産量7,000～8,000丁、漁家1軒で20～30丁のカギを持っていて、鮑漁だけで生活出来、カギ購入に錢をおしまなかった。</p> <p>末子の忠喜は石巻工業高校(3回生)を卒業、東京に就職、3年目に父によりもどされ家業を継いだ。21才から、父の仕事を盗見してカギの作り方を修得した。</p>	
職種(技術)等					
製作・加工の概要	<p>原材料には炭素鋼の棒鋼を切断して用い、送風器でコークス、木炭などで火をおこし、加熱して材料を鍛造し、ヤキを入れて仕上げ、最後に銀ベンキで塗装し販売する。</p> <p>一日の作業量は、一人で50丁位で必要時間は8時間、11月の鮑の開禁に間に合うように製作した(9月に出荷)。県内は自分で持つていて、県外は運送する。12月に集金し、翌年度の注文をとる。取り引き先は個人ではなく漁業協同組合毎に一括して行っている。</p>				



▲鮫浦港



①…丸型(泊型) ②…田老型

7	技術修得過程	職能分担過程	同業者の組織
職人 の 職 能 ・ 組 織	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校卒業で見習奉公 1 魚の仕入れ、運搬 2 魚の処理 3 摺り 4 裏ごし 5 板の上での成型 6 焼く（カステラ）（板かまぼこ） 7 むす（板かまぼこ） <p>上記1～6の段階を3年で概略を把握させる。本当に一人前になるには10年かかる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10年目で一人前の職人になる。 ・昔は親方の仕事のやり方をぬすんで習得し、よい蒲鉾をつくるにはどうすればよいか常に疑問を持ち修業したが今のは自己流の考えを先にして貞の技を会得しようがないから、10年たっても板の成型などできず20年かかる人もいる。 		<p>・昭和5年に石巻蒲鉾組合を結成する。役員は</p> <p>会長 毛塙氏 副会長 及川喜一氏（「ウオキ」） 会計幹事 三木屋四郎兵衛 会員は約20人位であった。総会で蒲鉾の価格を決め、一割位安値に出售した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他に宮城県蒲鉾組合石巻支部があった。 ・現在は石巻蒲鉾組合の会長は梶原氏である。

8	衣食住生活	年中行事・生産暦	信仰儀礼・禁忌伝承	符丁・教え方など	仕事歌
職人 の 生 活	<p>1. 住</p> <ul style="list-style-type: none"> ・妻帯者は通い。（2、3人） ・小高卒の見習いは六疊一間で居を共にする。（6～7人） 見習の出身は市内、気仙沼、山形、大河原であった。 <p>2. 食</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主人と一緒に食べ、皆同じで制限がなかった。 <p>3. 衣</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シャツの上に半纏を着用し、前ダレ（前掛）をつけた。一般に長靴ははいていた。 <p>4. 一日の生活</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝6～7時起床 ・魚市場に主人と一緒に魚の買出しに行く。残った者は店の仕事をする。 ・8時～9時食事 ・工場で魚の処理作業 	<p>1. 盆</p> <p>盆は休みで、住み込みの職人は3、4日休みをとり、家に帰った。シルシ半纏やセッターを与えた。</p> <p>2. 正月</p> <p>ヤブ入りの日に1～2日休みをとる。遠方の者は2、3日の休みをとり帰郷。その時小遣をくれる。</p> 	<p>特にない。</p>	<p>かくし符丁 ・アキナウコトヨカラ レ○ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 ・魚市場での植段の符丁 ソク…1 ブリ…2 キツ…3 グリ…4 ガレン…5 ロンジ…6 サイナン…7 バンド…8 キク…9 ヤマ…12 ピンピン…11 四ツ…25</p>	<p>なし</p>



5. 旧蒲鉾作業場（仲町一丁目）

6	種類	名称	用途	年間総生産量	収納保管、商圈、販売方法、決済方法など
製品	月型蒲鉾 (板蒲鉾)		御祝儀用品		・商圈 1 戦前…宮城県(石巻、半島方面、古川、登米、佐沼、鳴子、築館、迫) 福島県(飯坂) 山形県(米沢、新庄、酒田、鶴岡) 秋田県(本庄、秋田市、能代、大曲、横手、湯沢、横庄線) 岩手県(盛岡、花巻、黒沢尻、一関、尻沢、千厩屋) 以上東北5県の町を10か月おきに収金訪問した。 2 戦後 主に宮城県内である。
	細工蒲鉾	網、日の出、富士、わらび			
	笠蒲鉾		日常食べる 贈答用		
	揚蒲鉾	さつまあげ	日常食べる		



スリバチ（手彫り）
—明治から昭和初期まで使用—
（材料はみかげ石）



擣漬器（現在のスリバチ）
—昭和初期～現在—



▲ カステラナベと木べら



①マナ板 ②ツケ包丁（成形用）
③身コキ包丁（身をこきのぞく包丁）



▲ ササカマボコの成型木型



▲ 板 炉



①ウスッコ（計量カップ）

②型

- 握カマボコ（サツマアゲ）の成型…①～⑤
- ウラゴシ（手前、①～⑤に関係ない）



③ウスッコ（計量カップ）に入れて大きさを一定にする



④手で形に入れて成型



⑤仕上げ



・アゲカマを型成機にかけ、油蒼で揚げる



・ケンチンカマボコにのせるハモを焼炉で焼く

▼月型(板)カマボコの成型(板つけ)



①



②



③



④

◀ カステラのすり身



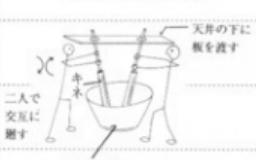
▲ 細工竹型カマボコの成型 ①成 型



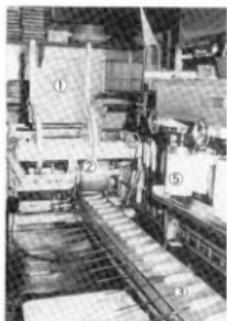
②仕上げ-a



b (柳すじをついている)

3	製作・加工の工程(細分の工程に留意)	具体的用具名	用具の使い方・変遷・個人的工夫など
製作・加工の工程・用具	1 頭取り 手作業で生魚の頭を包丁で切り取り、腹わたをとる。	・パン(大型のマナ板) ・包丁	
	2 身取り(身おろし) 尾をカネ(筋引)でとめて三枚におろし、身を包丁でこきとる。	・包丁(身こき包丁) ・カネ	
	3 晴し 身を水で2~3回洗う。		塩振り(キネ一本に四、五人につき交代で廻す。所要時間2時間)
	4 蔵断		
	5 摺り ①塩振り a 茄すり b 塩をさす	・チョッパ ・スリバチ ・キネ…2本	
	②仕上げり 砂糖、澱粉を入れて味つけをし、それに醤油とコンブなどを入れる。	・スリバチ ・キネ…1本	二人で交互に廻す
	6 裏ごし	・ヘラ	スリバチ
	7 成型 ①蕪鉢 a ウスッコ(スリミを木ベラか竹串でウスッコのなかに入る)	・ヘラ ・ウスッコ(計量カップ)	②月型(板)蕪鉢(板つけ) a 下おこし、中おこし(スリミをツケ包丁で板の上に3分位の厚さにのこす)板には大板(3寸5分~4寸)、中板(2寸5分~3寸)、小板(1寸5分~2寸)がある。
	b 車つけ(手で握るようにして3~4回スリミを竹串に押しつける) c 木型で形をつけ、できたらベンケイにさす。	・竹串 ・木型	b てりつけをする。(できあがったら)
	8 焼成(蕪鉢) 手焼炉の上に、ワタシ金をのせ、その上で焼く。焼きあがったら、竹串を抜いて、セイロにならべる。	・炉 ・渡し金 ・セイロ	8 蒸す…セイロを4~5枚重ねて蒸す。

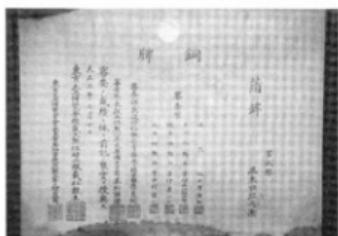
4. 工程写真



▲現在のササカマボコ成型機



支店（本舗）（仲町中央二丁目10~23）



2	原 材 料 の 名 称	原 材 料 の 入 手 方 法・経 路 な ど	保 存 状 況 そ の 他
素 材 （主 た る 素 材）	<p>○蒲鉾の原料</p> <p>1 明治～大正初期（祖父の時代） ロク（ムツ）</p> <p>2 大正～昭和（戦前） オオガイ（ウグイ）、ナヨ （オオガイ（ウグイ）の里身（フサイ）を包丁で除いたものに、ナヨ（身が白く、やわらかい）を混入） ヒラメ（ヒラメカマボコ） （身がノレン（透わりやすくべたべたになる）になるので、市場より求めたら早く頭や腹わたをとる）</p> <p>3 戦後 スケソウタラ、ヒラメ、キンキ （スケソウタラのスルミに50%ヒラメ）を混入しキンキの味を出す</p>	<p>田代島、谷川浜、小潤浜などの浜で地曳網で大量にとれる。 石巻市の魚市場より求める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オオガイ（ウグイ）…河北町、長面方面で大量にとれたものを、亀岡丸や山西の船で北上川を下って運搬した。石巻の魚市場より求める。 ・ナヨ…牡鹿半島沖、魚市場より求める。 ・ヒラメの小ぶりのもの…牡鹿半島各浜で大量に漁獲した。石巻の魚市場より求める。 <p>・魚市場より求める。</p>	
素 材 （そ の 他）	<p>○焼竹輪 アブラザメ （気仙沼地方でとれるヨシキリザメが一番良い材料である）</p> <p>○ハンパン サメ、ヤマトイモ （白くするためサメにヤマトイモを混入する）</p>	<p>・魚市場より求める。</p> <p>・ヤマトイモは関東でとれたものを用いる。</p>	

一札之事



宝曆の頃の三木屋（古文書）

一、此度爲屋佐右衛門殿方一而、御当地二月三度之飛脚
相勤、江戸表江御通用之金銀・諸荷物、上下共二請負
申度段、緞布・小間物・綿綿・薑種・木綿・古手御仲
間中江願申出い候、右六御仲間中御聞済被下、御用向
被仰付段承知仕候、然上ハ御仲間之外モ商売物ハ不及
申、都而貿物・染・仕入等取次仕候儀、堅爲仕間數之
申、御上様御留被成置い段、兼而承知仕罷有候
間、私宿之儀御座候得者、月三度之飛脚并不時飛脚荷
物下着仕候ハ、私立合吟味仕候而、御仲間之外商売物
ハ勿論直仕入れ・注文等、貲次・取次不申様、急度吟
味可仕い、且島屋佐右衛門殿手代衆并荷送仕候者ハ、
年々何人計に茂無之、其時々相替り申儀も可有之候、
其勘ハ右之趣間違無之様、急度可申渡し、為無相違、
仍一札如件、

着町

三木屋四郎兵衛印

宝曆十三年二月

緞布

御仲間衆中

諸職関係民俗文化財調査報告(1)

石巻市文化財保護委員 鈴木 東行

1. 蒲鉢

調査期間	平成4年 5月10日～ 8月30日	調査地	宮城県石巻市中里六丁目14～24	職種(技術)名	蒲鉢
話者	三木屋 四郎兵衛 (85才) 男 明治41年11月16日生				
技術伝承者(従事者)の呼称	(通称) 手付け職人 (家名・屋号) 蒲鉢三木屋 (その他) 現在の経営 ①本店・铸銭場 3～12 ②支店・仲町中央二丁目10～22 (本籍) ③支店 (工場) 中里六丁目14～24				
1	地域的特色			技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯	
調査地 ・職種 ・技術 等	<p>石巻は東端を北上川が南流、南端には羽黒山、東南に日和山があり、山裾と北上川に囲まれた地域である。天明8年(1788年)の『東遊雑記』には「石巻は奥州第一の津添にして、南部、仙台の産物この地へ出て江戸に積み、大坂に廻る。ゆえに諸国より入船數多にして繁昌の様なり……」とある。石巻は江戸時代、陸前北部の町方として、周辺浜方、陸方の政治、経済、文化の中心地として栄えて来た。</p> <p>幕末から明治にかけて、武士社会の崩壊、商人社会へのSocial mobilityは関東、関西、県内の他町村の人々に石巻に賭ける夢を与え、この石巻に来住し、一旗あげて財をなす者もでた。さらに政府の富国政策とあいまって、水産業に対する関心がたかまり、明治21年、中瀬で一府九県水産共進会を開催、明治30年には漆に牡鹿郡簡易水産学校が開校した。明治後半から大正初期にかけて漁業近代化(漁船の動力化、漁具の工業製品化)は、世界三大漁場の一つである金華山沖を前面に持つ、石巻に漁港としての価値を高め、海産物業の発展をもたらした。</p> <p>明治20年初頭、名取氏閑上に笠蒲鉢の前身である「手のひら蒲鉢」(「べろ蒲鉢」)、更に石巻市では三木屋、手塚氏が蒲鉢業を創始した。明治32年頃には氣仙沼で竹輪製造をやりだした。昭和5年、同業者20人余名で石巻蒲鉢組合を結成し、今日至っている。</p>			<p>三木家の口伝によれば、三木家は泉州堺の商人で、大坂に居住していたが伊達政宗公に請われて、仙台にうつり、立町にて御用商人として仙台城に伺候した。仙台の街造りと共に国分町19軒の内に配せられ鮮魚商を本業とし、宝曆の頃、両替商兼飛脚業をあわせて経営し、六仲間の商品を一手に運送した。明治になり、鮮魚商および料理職として鎮台に商品を納入した。</p> <p>明治になって、不幸結婚のため廢業、北海道移住を検討したが事情あって石巻に来住した。明治10年頃、石巻着町で鮮魚商を開業、明治21年蒲鉢業および仕出し料理業を併せ営んだ。料理に出すために蒲鉢業をはじめた。</p> <p>想作(大正14年死亡)一三郎兵衛(大正12年、38歳で死亡)ー真吉。祖父が大正14年に死亡すると東北学院を中退し、母の指導のもとに稼業を継いだ。26代目四郎兵衛を襲名し、母から蒲鉢製造の技術を伝授された。夏には大阪方面、冬には東北地方の料理屋に行って品質の改良について学んだ。</p>	
製作・加工の概要	製造加工の順序 1 頭とり 2 截断 3 塩すり 4 仕上げすり 5 形成 6 焼成				



▲タブノキ群落・鹿島神社



▲アカマツ・タブノキ群落



▲タブノキ・クロマツ群落・雷神社社叢



▲エゾノコギリソウ



▲クロマツ・ハマハイビャクシン群落・三ツ石



▲マイブルソウ



▲カシワ・タブノキ群落



▲ハマサジ



▲ タブノキ群落・二鬼城



▲ モミ・タブノキ群落



▲ クロマツ—タブノキ群落



▲ コナラ—タブノキ群落

表3. 海岸植物群落組成表

方形区番号	34	33	31	32	35
海抜(m)	6	7	30	20	15
方位	S 40° W	S 30° W	N 80° W	N 70° W	N 50° W
傾斜	25°	15°	25°	10°	25°
群落の高さ(m)	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
植被率(%)	40	100	100	100	100
群落区分	岩隙 植物群落	ハマニ ンニク群落	ハマハイビ クシン群落	ススキ群落	
種名	階層				
ラセイタソウ	IV	1	*	*	*
ハマツメクサ	IV	+	*	*	*
アオツヅラフジ	IV	*	+	*	*
センニンソウ	IV	*	+	*	*
サルトリイバラ	IV	*	+	*	*
ハマヒルガオ	IV	*	2	*	*
ハマエンドウ	IV	*	2	*	*
ハマニンニク	IV	*	5	*	*
ハマサジ	IV	1	1	*	*
フジナデシコ	IV	1	+	*	1
スカシユリ	IV	+	*	1	+
ハマギク	IV	*	1	1	1
コハマギク	IV	*	*	3	*
テリハノイバラ	IV	*	*	*	1
テリハノイバラ	IV	*	*	*	1
トベラ	IV	*	*	*	1
ハマハイビャクシン	IV	*	*	5	2
ハマボッス	IV	2	2	+	+
カモノハシ	IV	*	*	*	2
オニシバ	IV	*	*	*	1
コシンジュガヤ	IV	*	*	*	1
エゾノコギリソウ	IV	*	*	*	1
キキョウ	IV	*	*	*	+
リンドウ	IV	*	*	*	+
ウツボグサ	IV	*	*	*	+
ミヤコグサ	IV	*	*	*	+
マルバハギ	IV	*	*	*	+
アリノトウゲサ	IV	*	*	*	+
ヤマイ	IV	1	*	*	+
キリンソウ	IV	1	*	*	+
ススキ	IV	*	*	3	5

表2

田代島の森林群落の組成

層にチガヤが多く、ウシノシッペイ、オモダカ、トウオオバコ、クログワイ、ゲンノショウコがみられる。

(4) 蚤跡植物群落

手入れされなくなった休耕田の蛙跡にはススキ群落がみられる。放棄後の年数により違いがみられ、古いところでは木本が多くなる。

比較的放棄年数の少ない場所ではキジムシロ、ゲンノショウコ、スイカズラ、ヘクソカズラなどの草本とつる植物が混生するススキ群落となっているが、放棄年数の長い場所ではクロマツ、ヒサカキ、アキグミ、ヤマツヅジ、ガマズミ、バッコヤナギなどが目立つススキ群落となっている。

IV. ま と め

田代島は植生带上は暖温帯の性格をつよく示しており、おむね中間温帯に属する石巻市にあっては、特別な自然地域である。

暖温帯の自然植生・半自然植生であるタブノキ群落やクロマツ群落、海岸植物群落がよく保存されているばかりでなく、北方系の海岸植物や暖地系の植物が豊富にみられ、更に日本海要素とみられる植物も生育する。

牡鹿半島域の弁天島や桂島にはよく保存されたタブノキ林があるが、そこでみられる暖温帯の自然は小さな無人島という限られた環境でのすがたであり、暖温帯の自然の多くを知ることはできない。面積が大きく古くから人が住みながら保たれてきた田代島の自然は、さまざまな環境や人間生活との関係の中で多様な暖温帯の自然のすがたをみせている。

この地方における総合的な暖温帯の自然地域としての田代島の価値は非常に大きいものがある。

田代島の優れた自然を保存し活用するためには、今後更に調査を深める必要があるが、さしあたって必要なことをいくつか提案しておきたい。

1. 優れた自然のある場所を確認しておくこと。できれば何らかの標示をするなどして、一般の人に知らせるここと。

2. 田代島の自然全体が理解できるような主な群落や植物が観察できるコースの設定と、自然の理解を助けるためのパンフレットなどの作成をおこない、「自然教育センター」などで積極的に活用すること。

自然を守るためにには自然をよく観察することが基本になる。「自然教育センター」で自然の理解をめざした自然に親しむ活動をおこなうことは、島の自然を守っていく上からぜひやって欲しいことである。

3. 自然観察のコースとなる道などは、これまであったものを利用し、おおげさな工事を伴わないものとするここと。

文 献

- (1)猪熊泰三 (1934) 牡鹿半島及び其の附近の森林植物. 東京帝国大学農学部演習林報告20-4: 51-186.
- (2)木村有香 (1954) 宮城県北部の海岸地帯の植物. 三陸沿岸・牡鹿半島・松島学術調査書: 21-68.
- (3)石巻市小学校教育研究会理科研究部 (1957) 石巻市附近の生物(1) 田代島植物の部
- (4)内藤俊彦 (1975) 石巻市桂島の植生と植物相. 宮城の植物 3: 20-34.
- (5)佐々木豈 (1982) 弁天島植生調査報告. 石巻市文化財だより 11: 21-24.
- (6)岩根邦男 (編) (1992) 日本の野生植物 シダ. 平凡社
- (7)佐竹義輔他 (編) (1981-1982) 日本の野生植物 草本 I-II. 平凡社
- (8)佐竹義輔他 (編) (1989) 日本の野生植物 木本 I-II. 平凡社

は珍しいことである。

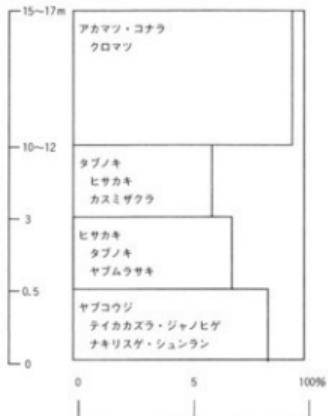


図10. アカマツ・コナラータブノキ群落階層構造模式図

これらの特徴を重視すれば、アカマツが優占する林分をアカマツータブノキーティカカズラ群落、コナラの優占する林分をコナラータブノキーハイイヌツケ群落として区別することができる。

7. 海岸植物群落

三ツ石海岸の崖地にはハマハイビャクシンの群落が広く分布している。西海岸の通称「水垂れ」の崖地では、海水面に近くときどき潮のかかるような環境に岩隙植物群落、傾斜が急で比較的乾いた環境にハマニンニク群落、傾斜がゆるやかで比較的湿った環境にスキ、カモノハシ群落がみられる。

(1) ハマハイビャクシン群落

匍匐性の低木ハマハイビャクシンが優占する群落で、岩場のある環境にみられる。スキが混生し優占度が高く、ハマギク、スカリュ、ハマボッス、がふつうにみられる。土壤の発達した部分ではコハマギクが多く、日当たりのよいところではハマナデシコ、テリハノイバラ、トベラなどがみられる。

(2) 岩隙植物群落

海水面に近い湿った岩場のところどころにハマサジ、ハマボッス、ヤマイ、キリンソウ、ラセイタソウ、フジナデシコ、ハマツメクサが疎らに生えている。

(3) ハマニンニク群落

ハマニンニクを優占種とするが、ハマエンドウとハマヒルガオの混生がめだつ群落で、ハマボッス、ハマサジ、ハマギク、フジナデシコなどの海岸植物のほかオツヅラフジ、サルトリイバラ、センニンソウなどのつる植物がみられる。

ハマニンニクは砂浜海岸にみられ、海岸線にもっとも近い環境に純群落をつくるのがふつうである。ハマエンドウとハマヒルガオはその後方に群落をつくり、ハマニ

ニクといっしょに群落をつくることはこの地方の砂浜海岸ではやや少ない。更に海岸植物や海岸湿地の植物をも構成種とする岩場上のハマニンニク群落は、あまり類のないめずらしい群落である。

(4) ススキ群落

ところどころ岩が露出した凹地にみられる丈の低いススキ群落である。風当たりが強くかなり湿った環境である。イスヨモギ、キキョウ、ウツボグサ、マルバハギ、ミヤコグサ、アリノトウグサなどススキ群落にふつうの植物のほか、北方系の海岸植物エゾノコギリソウと南方系の海岸植物イヨカズラがいっしょに生育し、カモノハシ、オニシバ、ヤマイ、コシソウガヤなどもみられるなどめずらしいススキ群落である。

8. 休耕地植物群落

(1) 放棄畠跡地のススキ群落

島の中央部の大泊側の台地にみられる高さ2mに達するススキ群落で、ススキが密生しヨモギ、スイカズラの混じる上部とスズメノエンドウを中心とする下部の二層に分けられる。下部の層ではスズメノエンドウ以外は個体数が少ない。センニンソウ、アオノツヅラフジ、ミツバアケビ、ゲンノショウコ、スイバ、カキドオシ、セリ、イグサ、オトギリソウ、ヒメジョオン、ナワシロイチゴなど、つる植物とヨモギ群落にふつうにみられる植物がほとんどである。

(2) ヨシ・ヒメガマ群落

島で最も水田が多く最近まで耕作されていたところは、ヒメガマの混じるヨシ群落となっている。

全体としてはヨシ・ヒメガマ群落であるが、細かくみると、水湿の少ない環境にヨシ群落、水湿の多い環境にヨシ・ヒメガマ群落、水深のある環境ではヒメガマ・クサヨシ群落というように区分できる。

ヨシ群落では、ヨシ以外にトダシバ、ヤマアワ、ウシノツバエ、ヨモギ、サワヒヨドリ、イヌヨモギ、ノコニギク、ノハラアザミ、スイバ、ミヅソバ、スズメノエンドウ、エゾカワラナデシコ、カワラマツバ、スイカズラ、ノイバラなどが出現し植物の種類が最も多い。

ヨシ・ヒメガマ群落では、上層でヨシとヒメガマが混生し、下層にはヒメシダ、セリ、アカバナ、チゴザサ、オオダイコンソウ、ツユクサ、イヌスギナなどがみられる。

(3) ヒメガマ群落とガマ群落

島の南西部の三ツ石寄りのところには、休耕年数の古い小面積の放棄水田跡がある。ここにはヒメガマ群落とガマ群落がみられる。

ヒメガマ群落ではヒメガマ以外にチゴザサ、ヤマアワの優占度が高く、サヤスカグサ、サンカケイ、セリ、アカバナ、アゼオトギリ、ミズユキノシタ、スイカズラなどがみられる。

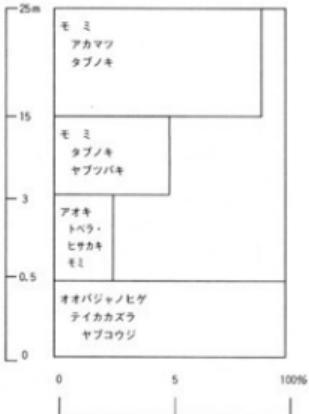
ガマ群落では、上層でガマにアブラガヤが混生し、下

層、低木層にも後継ぎのクロマツがみられるのがふつうで、将米ともクロマツ群落としてつづく自然林の性格をもっている群落だということができる。

4. モミ・タブノキ群落（モミ・タブノキーオオバジャノヒゲ群落）

島の最高地点付近に胸高直径50cm~60cm高さ25mに達するモミを主にした小林分がある。高木層にアカマツ、タブノキ、ケヤキ、カスミサクラ、コナラなどを混生し、再生した群落であることが分かる。優占種モミは各階層に出現する。

タブノキ群落の要素の濃いモミ群落で、タブノキは亜高木層ではモミに次ぐ優占度を示し、草本層での椎樹の数はモミよりも多い。低木層でアオキ、草本層でオオバジャノヒゲがそれぞれ優占し、ヤブツバキ、ヒサカキ、トベラ、ティカカズラ、ヤブコウジ、ジャノヒゲなど常緑の種が目立つ。量的には少ないがヤブムラサキ、コゴメウツギなどの落葉低木とセンダイスゲが出現するのが特徴的である。



5. カシワ・タブノキ群落（カシワ・タブノキーオオバジャノヒゲ群落）

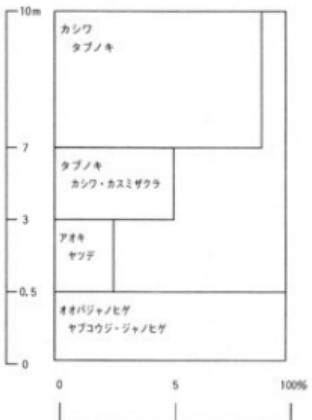
冬の季節風が強く当たる島の北西側に、高さ10m胸高直径20cm前後のカシワが優占し高木層にタブノキを混生する小林分がある。赤土質の土壤の未熟な環境である。

カシワ、タブノキとも亜高木層、低木層に若い木がみられ、低木層ではアオキが優占する。亞高木層以下ではトベラ、ヤツデ、ヒサカキなどの常緑樹種とヤブムラサキ、ガマズミ、ヤマウグイスカグラ、コマユミなどの落葉樹種が混生するが、ヤマグワ以外はアカマツ、コナラ群落と共通である。

草本層ではヤブコウジ、オオバジャノヒゲの優占度が高く、次いでジャノヒゲの優占度が高く、ハイイヌツゲ、ナキリスゲ、チゴユリ、トリアシショウマ、ヤマユリな

どが出現する。

小竹の弁天島のタブノキ・カシワ群落（カシワ・タブノキーやマツツジ群落）と比べると、常緑植物の混生が多く、落葉樹種の混生が少ないので特徴である。



6. アカマツ・コナラータブノキ群落

島の最高地点付近の西側斜面には、高さ15m~17mのコナラを混生するアカマツ林があり、一部沢筋寄りにコナラの優占する林分がみられる。優占種のアカマツの胸高直径は25cm~35cm、コナラの胸高直径は10cm~20cmである。

全体の階層構造は、モミ・タブノキ群落やカシワ・タブノキ群落と比べて草本層の発達がよい。亜高木層でタブノキ、低木層でヒサカキが優占し、草本層でヤブコウジが高い優占度を示す。ほかにクロマツ、カスミサクラ、キッコウハグマ、ナキリスゲ、シュラン、ジャノヒゲなどがふつうにみられ、他の高木群落でふつうにみられるオオバジャノヒゲが全くみられないなど、アカマツの優占する林分もコナラが優占する林分もほとんど同じで、全体としてはアカマツ・コナラータブノキーやマツツジ群落とすることができる。

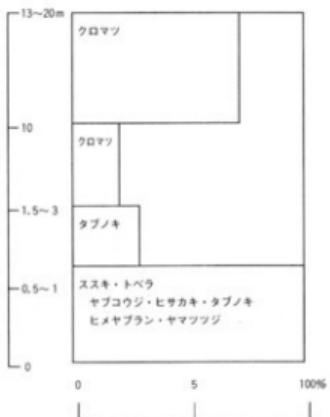
アカマツの優占する林分ではアオハダ、ウラジロノキ、マルバオダモ、ヤマウルシ、イタヤカエデ、モミ、スギなどの高木樹種が出現し、ティカカズラの優占度が高いことなどの特徴がある。

一方コナラの優占する林分では、ヤマツツジ、オオバクロモジ、ツリバナ、ガマズミ、メギ、ヤマウグイスカグラなどの低木樹種が多くみられ、草本層ではハイイヌツゲが優占し、フルアリドオシも出現する。チゴユリ、ハエドクソウ、フルリンドウ、ミヤマウズラなど草本植物の出現が多いのが特徴である。ハイイヌツゲを林床植物とする群落は多雪地帯に多く、宮城県では奥羽山地寄りの地域ではふつうにみられるが、海岸部でみられるの

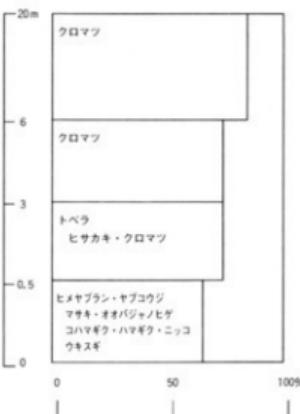
ジが目立ち、ミツバアケビがふつうである。他のクロマツ群落に出現するスキとそれに伴って出現する植物は全くみられず、この群落を特徴づけるのは、低木層以下に出現するシロダモだけである。田代島における典型的なクロマツ群落である。

(2) クロマツーススキ群落

日当たりがよく風当たりの強い北西斜面を立地とする群落で、優占種のクロマツが2~3層にわたって出現する。マツクイムシの影響はみられないが高木層はかなり疎らで、亜高木層と低木層の発達もよくない。草本層だけは非常によく発達し、スキと丈の低いトベラ、ヒサカキの優占度が高く、ヒメヤプラン、ヤマツヅジ、ヒカゲスゲなどがふつうに出現し、コナラやヤマウルシ、ガマズミなどの実生がみられる。

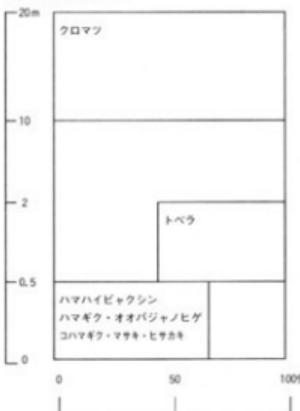


スギなどのほかニッコウキスゲ、コハマギク、アキノキリンソウなどがみられる。



(4) クロマツーハマハイビャクシン群落

南向きの岩場を含む環境にみられる群落で、亜高木層を欠き、低木層でトベラ、草本層でハマハイビャクシンが優占する。低木層のトベラと草本層のハマハイビャクシンはモザイク状に住み分けている。ハマギク、コハマギク、スカシユリ、ニッコウキスゲ、スキなどは他の群落と共通であるが、ヒメヤプランがみられずイキボウフウ、マルバトウキ、オオウシノケグサなどが出現する。



島中央部の段丘上では亜高木層にもクロマツが見られる二段林を形成し、タブノキの混生が多く、アカマツ、カスミサクラ、マルバアオダモ、ハイイヌヅゲ、レンゲツヅジやチゴユリ、ヤマユリなどのみられる群落となっている。海岸寄りのところでは低木層にもクロマツがみられる三段林を形成し、タブノキは草本層だけにみられ、オオバジャノヒゲやマサキの優占度が高く、テリハノイバラ、カワラマツバ、スカシユリ、ハマギクなどクロマツヒメヤプラン群落と共通の種類がみられる。

(3) クロマツーヒメヤプラン群落

海岸にもっとも近い南西斜面を立地とし、亜高木層、低木層が発達したクロマツ二段林群落である。

高木層と亜高木層ではクロマツ以外は出現しない。低木層はトベラが優占し、クロマツ、タブノキ、コナラ、モチノキ、マサキ、ヒサカキなどが混生する。草本層ではヒメヤプランとヤブコウジの優占度が高く、次いでオオバジャノヒゲ、マサキ、キヅタなどが目立つ。クロマツーススキ群落と共通するスキ、テリハノイバラ、カワラマツバ、ハマギク、ヒカゲ

これらのクロマツ群落の4型の中で、(1)は将来タブノキ群落に移り変わる群落であるのに対し、(2)(3)(4)は亜高木

タブノキ・ベラーヤ・ヤブコウジ群落と竹浜の桂島のタブノキ・マサキ・キヅタ群落などがある。田代島のタブノキ・アオキ・テイカカズラ群落は、これらの群落とはアオキ、シロ、ヤツデ、ベニシダなどを構成種とする点で区別できる。

2. タブノキ・クロマツ群落（タブノキ・クロマツ・オオバジャノヒゲ群落）

仁斗浜の雷神社や大杉神社の社叢のクロマツを混生するタブノキ群落は、高木層はよく発達しているが草本層の発達がタブノキ・アオキ・テイカカズラ群落にくらべて不良である。ヤブツバキ、ベニシダが全くみられず、アオキ、テイカカズラの出現がわずかで、優占種のタブノキの若木は亜高木層以下の各層にみられるが、クロマツの若木は全くみられない。

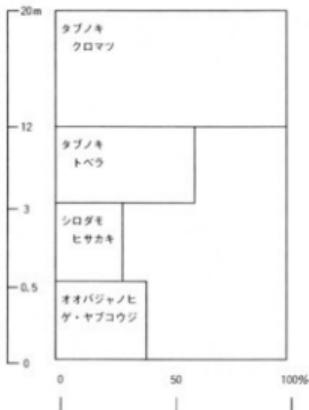


図3. タブノキ・クロマツ群落階層構造模式図

亜高木層ではタブノキとトベラが多く、シロダモも混じる。低木層ではシロダモが多くヤツデ、マサキ、ヒサカキが混じる。草本層ではオオバジャノヒゲが優占し、ヤブコウジとジャノヒゲがふつうでキヅタも混じる。

常緑植物が多くそのほとんどがタブノキ群落と共通の種であるが、クロマツ、シロダモが混生すること、夏緑性のシダ類やクロマツ群落と共にセニンソウ、ノイバラ、アカネなどのつる性植物がみられることなどがこの群落の特徴である。群落を構成する植物の種数は多くない。

タブノキ林が壊された場合、多くはクロマツの混じるタブノキ林として回復し、人為的加わり方が強いとまずクロマツ林として回復するのがふつうである。田代島のタブノキ・クロマツ群落は、以前タブノキ林であったところに人為が加わった後にできたタブノキ・クロマツ・オオバジャノヒゲ群落である。

3. クロマツ群落

クロマツ林は田代島の森林群落の中では最も広い面積

を占めているが、さまざまな林相をもつ群落がみられる。最近マツクイムシの被害を受けて林相の安定していない林分も多くなっている。いっぽんに林令が高く、植林されたものもあると思われるが、自然生のものとの区別がつけにくくなっている。

クロマツ群落全体では、タブノキ群落と共通する常緑植物のタブノキ、ヒサカキ、トベラ、マサキ、ヤブコウジ、キヅタ、オオバジャノヒゲなどはふつうにみられるが、アオキ、シロなどはほとんどみられなくなる。また、アカマツ・コナラ林と共通の草本やつる性植物が多くみられる。

環境、林相と種類組成から四つの群落に区分することができます。

- (1) クロマツータブノキ群落
- (2) クロマツーススキ群落
- (3) クロマツヒメヤプラン群落
- (4) クロマツハマハイビャクシン群落

(1) クロマツータブノキ群落

比較的土壤の発達した風当たりの少ない環境にみられ、タブノキ群落への回復が著しい群落である。クロマツは高木層だけにみられ、亜高木層以下に後継ぎのクロマツはみられないのがふつうである。

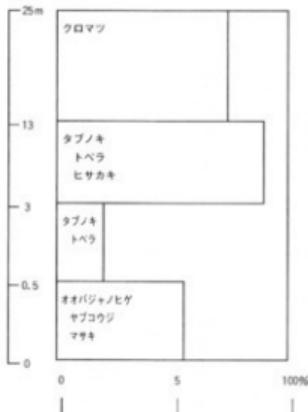


図4. クロマツータブノキ群落階層構造模式図

以前タブノキ林であった環境に人為の影響があつて成立した群落で、このまま推移すれば、将来タブノキ・クロマツ群落からタブノキ群落に変わっていくと考えられる。

高木層はマツクイムシの被害などもあって林冠に隙間が多い。亜高木層の発達が良好でタブノキが優占し、島の中央部ではコナラやカスミサクラ、海岸寄りではエノキなどの混生が見られる。低木層の発達は不良でトベラ、ヒサカキ、マサキがふつうにみられるほかはサンショウ、オオバイボタなどわずかの樹種がみられるだけである。草本層ではオオバジャノヒゲが優占し、次いでヤブコウジ

年生草本で、花弁の間に隙間があるところから「すかしゆり」の名ができた。島ではヤマユリと区別して「はまゆり」と呼ぶのがふつうのようである。

(29) マイヅルソウ(ユリ科)

アナ林の林床にふつうに見られる小型の多年草。北上山地や牡鹿半島ではしばしば低い標高のところや海岸で見ることがある。田代島では大泊から二鬼城に行く途中の道ばたに群落がある。

III. 田代島の植物群落

田代島でふつうにみられる植物群落はタブノキ群落とクロマツ群落である。タブノキ群落は社寺の周辺など自然の保護されて来た環境にみられ、島の東南側に多い。クロマツ群落は島全体にみられ、面積的には最も広い。

石巻地方の丘陵部や牡鹿半島でみられるモミ群落、アカマツ・コナラ群落やカシワ群落は、田代島では、島の西側にわずかにみられるだけである。モミ群落とアカマツ・コナラ群落は段丘上にみられ、カシワ群落は海拔高の低いところにみられるが、どの群落もタブノキをはじめとする常緑樹の混生が目立つ。

タブノキは島の全城に広く分布し、大木や古木が多く、またいたるところに椎樹や実生がみられる。石巻地方の丘陵部の自然を代表する樹木とされるモミは島の最高部のあたりにわずかにみられるだけであるし、イヌブナは全く生えていない。これらのこととは田代島は他の石巻市域とは異なってタブノキで代表される常緑広葉樹林帯(暖温帶)に属する地域であることを示している。

高木群落以外には、ハマハイビャクシン群落、ハマニシニク群落、スキ・カモノハシ群落、岩陰植物群落などの海岸植物群落を西海岸で、放棄畠地のスキ群落を島の中央部で、休耕田のヨシ・ヒメガマ群落、ヒメガマ群落、ガマ群落、畦跡植物群落などを仁斗田と三ツ石との間で調査した。

1. 調査の方法

調査区内に方形区(高木群落: 15m × 15m, 10m × 10m, 低木群落・草木群落: 2m × 2m, 1m × 1m.)を設け、階層別に出現する種のリストを作り、それぞれの種について被度を測定して記録した。階層は一般に高木層、亜高木層、低木層、草木層とした。

被度はBraun-Blanquet(1964)の総合判定法による優占度で評価し、次の方法に依った。

- 5: 調査面積の75%以上を被う。固体数は任意。
- 4: 調査面積の50%~75%。固体数は任意。
- 3: 調査面積の25%~50%。固体数は任意。
- 2: 調査面積の10%~25%。または、固体数は極めて多い。
- 1: 固体数が多いが被度は5%以下。
- +: 固体数はわずかで被度も低い。
- r: 極くまれに小さい被度で出現する。

植生調査の記録から組成表を作成し、群落区分をおこなった。

2. 主な植物群落

1. タブノキ群落(タブノキーアオキーテイカカズラ群落)

タブノキ林は暖温帯の海岸部を代表する常緑広葉樹林で、単木としてのタブノキは岩手県まで分布するが、タブノキ群落としてみられるのは太平洋側では宮城県が北限とされている。宮城県では、田代島から唐桑半島までの県北部の海岸部に集中してみられる。この地域の独特な自然景観を形成している。その主なものは国の天然記念物に指定されたり、環境庁の「日本の重要な植物群落」に選定されたりしている。

今回調査したタブノキ群落は、大泊の船着場南側の崖地と鹿島神社社叢、二鬼城灯台下の谷沿いのタブノキ群落である。樹高15m以上、胸高直径30cm以上1mのタブノキが優占する純林状の林分で、亜高木層以下に後継となるタブノキの若木や実生がふつうにみられる。群落を構成する植物の数は比較的小なく、その多くは常緑植物で、夏緑植物はごくわずかである。

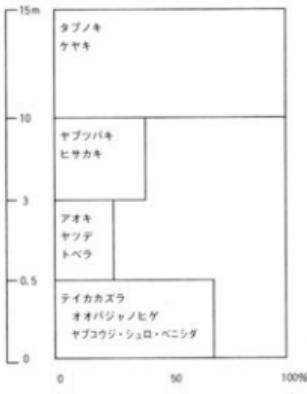


図2. タブノキ群落階層構造模式図

高木層にはときにケヤキを混生することがある。亜高木層ではヒサカキ、ヤブツバキがふつうで、モチノキがみられることがある。低木層ではアオキが優占し、トベラ、ヤツデがふつうで、マサキやオオバヤボタがみられることがある。草木層ではティカカズラが優占し、ベニシダが特徴的に出現するほか、オオバジャノヒゲ、ヤブコウジ、シロなどがふつうである。

田代島のタブノキ群落は、低木層と草木層の優占種で代表させてタブノキーアオキーテイカカズラ群落と呼ぶことができる。石巻市には、ほかに、小竹の弁天島のタ

(10) タブノキ（クスノキ科）

暖かい地方の海岸の自然林を代表する常緑高木。田代島や半島部ではもちのきの名で呼ばれることが多い。岩手県を北限の産地とするが、タブノキ群落をつくるのは宮城県までである。県内の主なタブノキ群落は県北部の海岸地域にあり、志津川町椿島、雄勝町八景島、石巻市の柱島と弁天島などの無人島がよく知られている。

田代島では全島いたるところで普通にみられ、大泊地区では鹿島神社と道祖神、仁斗田地区では田代寺跡、大杉神社、三室荒神、雷神社など、社寺の境内に大木を見ることができる。

田代島の自然景観を形成する最も重要な植物である。

(11) オオバタキンキリマメ（マメ科）

宮城県を北限の産地とするつる性の多年生草本。昭和50年代に石巻市牧山で採集されたのが最北の記録であるが、その後牧山では見つかっていない。田代島では2ヶ所で採集されており、現在確認できる最北の産地である。

(12) ハイヌツヅ（モチノキ科）

イヌツヅの変種とされる耐飼性の低木で、日本海側のアーラ木の林床ではふつうに見られる植物である。やや湿った環境を好み、県内の奥羽山地ではツルアリドオシと混生することが多い。

今回の調査で島の西側海岸で発見された。沢筋の林床に群落をつくり、ツルアリドオシと混生しているところも観察された。この地方では最初の確認である。

(13) ヤツデ（ウコギ科）

石巻地方では庭木として植えられることの多い常緑の低木であるが、田代島ではタブノキ林内にふつうに生え椎樹も多く見られる。牡鹿半島では清崎や牧崎などでみられることから、この地方が北限の産地となるものと考えられる。

(14) マルバトウキ（セリ科）

北方系の海岸植物で南限の産地は茨城県にあるが、福島県以南では稀で、日本海側には分布しない。牡鹿半島や田代島ではふつうに見られる。

(15) ハマサジ（イソマツ科）

東北地方では宮城、福島両県のみに産する暖地系の塩生植物で、花屋で売られる乾燥花にもされるスタークスの仲間である。ふつう海岸の湿地に群生するが、田代島では西海岸のときどき潮のかかる岩場にかなりの個体数が生育している。牡鹿半島では小竹浜と桃浦で見られるがやはり岩場である。

(16) テイカカズラ（キヨウチクトウ科）

常緑つる性の木本で、岩手県を北限の産地とするが、宮城県でも北上川以北では稀な植物である。内陸部では葉が小型になり果実をみることが少ないので、田代島ではタブノキ林や社寺の周辺の林内や林縁で大型の葉をつけたものが繁茂し果実をつける株が多く見ることができる。

(17) イヨカズラ（ガガイモ科）

日当たりのよい草原や岩場に生える暖地系の海岸植物で、東北地方では宮城県だけに産地がある。県内では外洋に面した島に多く見られる傾向があり、離島以外では

牡鹿半島と雄勝半島にそれぞれ1ヶ所ずつの産地が知られるだけである。

田代島では西海岸に2ヶ所の産地がある。

(18) ハマヒナノウツツボ（ゴマノハグサ科）

宮城、岩手両県のみに産する三陸海岸の特産種。田代島では東側海岸の岩場でややふつうに見られたが、最近は工事などの影響で少なくなっている。

(19) ハマウツツボ（ハマウツボ科）

ヨモギの仲間に寄生する1年草で、夏、10~20cmの直立した黄褐色の茎の上部に淡紫色の花を沢山つける。県内では産地が少ない。仁斗田から三ツ石に行く途中の道端で確認されている。

(20) エゾオオバコ（オオバコ科）

海岸の岩場や草地にみられる北方系の植物で、全体に毛が生えているのが特徴である。海岸近くで見られる。

(21) ツルアリドオシ（アカネ科）

山地のやや湿った林床や林縁に生える多年草であるが、石巻周辺では産地が少ない。牡鹿半島では光山のブナ、モミの回復が見られる林の林床で確認されているだけである。島の西側に生育が確認されている。

(22) エゾノギヨリソウ（キク科）

福島県を南限の産地とする北方系の多年草で、外洋に面した海岸地域に偏る傾向がみられ、県内では離島以外の産地は少ない。田代島では比較的ふつうに見られる。

(23) センダングサ（キク科）

関東以西に産するとされる一年草で、県内では牡鹿半島周辺だけに採集されている。田代島では、人家周辺や道端に生えているのが観察される。

(24) ハマギク（キク科）

日本特産の低木の菊で、栽培もされる。海岸の崖地などに群落をつくり、秋、白く大きい頭花をつける。青森県から茨城県の海岸に分布するが、中心は三陸海岸であり、三陸海岸の景観をいろいろと植物として重要である。田代島では海岸にふつうに見られる。

(25) コハマギク（キク科）

海岸の岩場などに生える小型の多年草で、地下茎を出して殖え群生する。秋ハマギクより遅れて白色の頭花をつける。南限はハマギクと同じ茨城県であるが、北はアラスカまで分布する北方系の種で、日本海岸には分布しない。秋の海岸をいろいろと植物として重要である。田代島では海岸にふつうに見られる。

(26) ナキリスゲ（カヤツリグサ科）

岩手県を北限の産地とする常緑のスゲで、叢生する。秋から冬にかけて果実をつけるのが特徴である。南向きの日当たりのよい林に普通に見られる。

(27) センダイスゲ（カヤツリグサ科）

宮城県で最初に記録されたナキリスゲの変種で、叢生しないで地下茎を出すことでナキリスゲと区別される。ナキリスゲは陽地に、センダイスゲはやや陰地にと住み分けているようにみられる。

(28) スカシユリ（ユリ科）

海岸の岩場で、夏、橙赤色の花を上向きに咲かせる多

96. ヒガシバナ科 ヒガシバナ, キツネノカミソリ, ナツズイセン。
97. ヤマノイモ科 ヤマノイモ, オニドコロ。
98. ミズアオイ科 コナギ。
99. アヤメ科 シャガ, ヒメヒオウギスイセン。
100. イグサ科 ヒロハノコウガイゼキショウ, イクサイ, スズメノヤリ, ヌカボシソウ。
101. ツユクサ科 イボクサ, ツユクサ。
102. イネ科 カモジグサ, スズメノテッポウ, コブナグサ, トダシバ, ヤマカモジグサ, イヌムギ, キツネガヤ, ノガリヤス, ヤママワ, ヒメノガリヤス, オガルカヤ, カモガヤ, メビシバ, アキメビシバ, イヌビエ, オヒシバ, ハマニンニク, カゼクサ, オニウシノケグサ, ナギナタガヤ, オオウシノケグサ, ウシノシッペイ, コウボウ, シラゲガヤ, チガヤ, サヤスカグサ, チゴザサ, カモノハシ, ネズミムギ, アシボソ, オギ, ススキ, ケチヂミザサ, コチヂミザサ, オオクサキビ, スズメノヒエ, タカラシバ, ヨシ, ミゾイチゴツナギ, スズメノカタビラ, ナガハグサ, イチゴツナギ, アキノエノコログサ, キンエノコロ, オオエノコログサ, エノコログサ, ハマエノコロ, オオアブラスキ, シバ, オニシバ, マダケ, アズマネザサ, ヤダケ, ミヤコザサ, クマイザサ, アズマザサ。
103. ヤシ科 シロ。
104. サトイモ科 七キショウ, ミミガタテンナンショウ, ウラシマソウ, カラスピック
105. ウキクサ科 ウキクサ。
106. ガマ科 ヒメガマ, ガマ。
107. カヤツリグサ科 エナシヒゴクサ, ミヤマシラスゲ, アオスゲ, ヒメカシスゲ, カサスゲ, ヒカゲスゲ, ジュズスゲ, ナキリスゲ, センダイスゲ, ゴウソ, ジュズスゲ, タガネソウ, アゼスゲ, ヒメクグ, タマガヤツリ, コゴメガヤツリ, カヤツリグサ, ハリイ, アゼテンツキ, ヤマイ, クログワイ, ホタルイ, マツカサススキ, サンカクイ, アブラガヤ, コシンジュガヤ。
108. ラン科 サイハイラン, シュンラン, カキラン, ミヤマウズラ, クモキリソウ, ネジバナ。

2. 注目すべき植物

(1) イワヒメワラビ (コバノイシカグマ科)

金華山島では松林の下に群生し普通にみられるが、県内では海岸部に稀にみられる暖地系の常緑シダ草本。石巻市内では他に日和山、牧山、桃浦などに産地がある。

(2) オオバノイモトソウ (イノモトソウ科)

関東地方では普通にみられるが、東北地方では稀な常緑シダ草本。宮城県を北限の産地とする植物の一つで、

雄勝町木浜が最北の産地となっている。大泊地区で生育が確認されている。石巻市ではほかに牧山と小竹浜に産地がある。

(3) ベニシダ (オシダ科)

岩手県を北限とする常緑シダで、県内では内陸部のスギ林などでも見られる。新葉が紅くなるシダで、田代島ではごく普通であり、人家の周辺やタブノキ林に多く見られる。

(4) イノデ (オシダ科)

宮城県を太平洋側での北限の産地とするやや大型の常緑シダ。県内では稀な植物であるが、田代島では島の東側の人家周辺に多い。イノデとアスカイノデとの雑種であるミウライノデも同じ場所に混生する。イノデ、ミウライノデともに石巻市では田代島以外では確認されていない。

(5) マメヅタ (ウラボシ科)

暖かい地方の岩場や樹幹などに着生する小型の常緑シダ。宮城県を北限の産地とし、北上川以北では見つかっていない。石巻市では牧山と生草島に産するが個体数は少ない。大泊の船着場付近の岩場には県内で最大の産地があるほか、タブノキ林内などでもたまに見られることがある。

(6) クロマツ (マツ科)

暖かい地方に多いマツで、宮城県では海岸に自然生のものがある。アカマツを離松 (ママツ) と呼ぶのに対してクロマツは雄松 (オマツ) と呼ばれる。田代島ではアカマツもあるがクロマツがふつうで、島の自然景観をつくる上で重要なたらきをしている。島の西側にはみごとなクロマツ林があるが、最近マツクイムシの被害が甚だしい。

(7) ウラジロガシ (ブナ科)

宮城県を北限の産地とする常緑のカシ。宮城県では角田市の斗藏山のウラジロガシ林が有名であるが、県北部では松島町や鳴瀬町宮戸島の海岸に自生があり。石巻周辺にも点々と自生状のものが見られる。

田代島では仁斗田地区にタブノキといっしょに生えている木本があり、稚樹も観察される。

(8) フジナデシコ (ナデシコ科)

別名ハマナデシコ。南方系の植物で岩手県の広田半島が北限の産地である。牡鹿半島以北では数が少なくなる。田代島では日当たりのよい海岸の岩場に多い。葉に光沢があり、夏、真っ直ぐに立った茎の上に紅紫色の美しい花をたくさんつける。

(9) シロダモ (クスノキ科)

気仙沼市大島を太平洋側の北限の産地とする常緑高木。葉の裏が白くうらじろの名で呼ばれることがある。県内では砂浜海岸の後背地に多く見られ、磯浜ではほとんど見られない。石巻市では漆小学校裏のケヤキ・シロダモ林があり、日本の重要な植物群落の一つに選定されている。

田代島では島の南側で見られることが多く、秋黄色い花と赤い果実をいっしょにつけて目立つ。

50. ニガキ科 ニガキ。
 51. ヒメハギ科 ヒメハギ。
 52. ドクツツギ科 ドクツツギ。
 53. ウルシ科 ツタウルシ, ヌルデ, ヤマウルシ,
 ウルシ。
 54. カエデ科 イタヤカエデ。
 55. モチノキ科 イヌツゲ, ハイイヌツゲ, モチノキ。
 56. ニシキギ科 ツルウメモドキ, ニシキギ, コマユミ,
 ツルマサキ, マサキ, ツリバナ,
 カントウマユミ。
 57. ミツバウツギ科 ミツバウツギ。
 58. クロウメモドキ科 クマヤナギ。
 59. ブドウ科 ノブドウ, ツタ, エビヅル,
 サンカクヅル。
 60. アオイ科 フユアオイ。
 61. グミ科 アキグミ。
 62. スミレ科 タチツボスミレ, マキノスミレ, スミレ,
 ニオイタチツボスミレ。
 63. ウリ科 スズメウリ, キカラスウリ。
 64. ミソハギ科 ミソハギ, エゾミソハギ。
 65. アカバナ科 ミズタマソウ, アカバナ,
 ミズユキノシタ, メマツヨイグサ,
 オオマツヨイグサ。
 66. アリノトウグサ科 アリノトウグサ。
 67. ミズキ科 オオキ, クマノミズキ, ミズキ,
 ハナイカダ。
 68. ウコギ科 ヤマウコギ, ウド, タラノキ, ヤツデ,
 キヅタ。
 69. セリ科 ノダケ, シャク, セントウソウ, ハマゼリ,
 ミツバ, オオチドメ, マルバトウキ, セリ,
 ヤブニンジン, ヤマゼリ, ウマノミツバ,
 イブキボウフウ, ヤブジラミ。
- 合弁花類
70. リョウブ科 リョウブ。
 71. イチヤクソウ科 イチヤクソウ。
 72. ツツジ科 レンゲツツジ, ヤマツツジ, ナツハゼ,
 73. ヤブコウジ科 ヤブコウジ。
 74. サクラソウ科 オカトラノオ, コナスピ,
 ハマボッス。
 75. インマツ科 ハマサジ。
 76. モクセイ科 マルバアオダモ, イボタノキ,
 オオバイボタ。
 77. リンドウ科 リンドウ, センブリ, フルリンドウ,
 78. キョウウチクトウ科 テイカカズラ。
 79. ガガイモ科 フナバラソウ, イヨカズラ,
 スズサイコ, コイケマ, ガガイモ。
 80. アカネ科 ヤエムグラ, ヨツバムグラ,
 カワラマツバ, ツルアリドオシ, ヘクソカズラ,
 アカネ。
 81. ヒルガオ科 ヒルガオ, ハマヒルガオ, コヒルガオ。
 82. ムラサキ科 ハナイバナ, ホタルカズラ, タビラコ,
83. クマツヅラ科 ムラサキシキブ, ヤブムラサキ,
 クサギ。
 84. シン科 カワミドリ, クルマバナ, イヌトウバナ,
 ナギナタコウジュ, カキドオシ,
 ヒメオドリコソウ, メハジキ, シロネ,
 ヒメシロネ, ハッカ, ヒメジソ,
 ヤマハッカ, ウツボグサ, ツルニガクサ,
 85. ナス科 クコ, ヒヨドリジョウゴ, イヌホオズキ,
 86. ゴマノハグサ科 ハマヒナノウスツボ,
 タチイヌノフグリ, イヌノフグリ,
 オオイヌノフグリ。
 87. ハマウツボ科 ハマウツボ。
 88. ハエドクソウ科 ハエドクソウ。
 89. オオバコ科 オオバコ, エゾオオバコ,
 トウオオバコ, ヘラオオバコ。
 90. スイカズラ科 ヤマウグイスカグラ, スイカズラ,
 ニワトコ, ガマズミ, ミヤマガマズミ。
 91. オミナエシ科 オトコエシ, オミナエシ。
 92. キキョウ科 ツリガネニンジン, ヤマホタルブクロ,
 ミゾカクシ, キキョウ, タニギキョウ
 93. キク科 エゾノコギリソウ, ノブキ,
 キッコウハグマ, オトコヨモギ, イヌヨモギ,
 ヨモギ, ノコンギク, ヤマシロギク,
 シラヤマギク, オケラ, センダングサ,
 アメリカセンダングサ, タウコギ, タマブキ,
 ヤブタバコ, ガンクビソウ, サジガンクビソウ,
 ハマギク, コハマギク, ダキバヒメアザミ,
 オオノアザミ, ノアザミ, ナンブアザミ,
 ノハラアザミ, ベニバナボロギク,
 ダンドボロギク, ヒメジョオン,
 ヒメムカシヨモギ, ハルジョン,
 オオアレチノギク, ヒヨドリバナ,
 ミツバサワヒヨドリ, ハハコグサ, チチコグサ,
 カセンソウ, オオジシバリ, ニガナ,
 イワニガナ, ユウガギク, カントウヨメナ,
 アキノノゲシ, ヤマニガナ, フキ, コウゾリナ,
 センダイトウヒレン, ノボロギク, タムラソウ,
 メナモミ, セイタカアワダチソウ,
 トキワアワダチソウ, アキノキリンソウ,
 オニノゲシ, ハチジョウナ, ノゲシ,
 ヤブレガサ, エゾタンボボ, セイヨウタンボボ,
 ウスギタンボボ, オナモミ, ヤクシソウ,
 オニタビラコ。
- 単子葉植物
94. オモダカ科 ヘラオモダカ, オモダカ。
 95. ユリ科 チゴユリ, ニッコウキスゲ, ヤブカンゾウ,
 ヤマユリ, ユバユリ, オニユリ, スカシユリ,
 ヒメヤブラン, ヤブラン, マイヅルソウ,
 ジャノヒゲ, オオバジャノヒゲ, ヒメイズイ,
 ミヤマナルコユリ, アマドコロ, オモト,
 サルトリイバラ, シオデ, ヤマカシュウ,

シダ植物

1. ヒカゲノカズラ科 ホソバトウゲシバ。
2. トクサ科 スギナ、イヌスギナ。
3. ハナヤスリ科 ヒロハハナヤスリ、
フユノハナワラビ。
4. ゼンマイ科 ゼンマイ。
5. コバノイシカグマ科 オオレンシダ。
イワヒメワラビ、ワラビ。
6. イノモトソウ科 オオバノイノモトソウ。
7. チャセンシダ科 トラノオシダ。
8. シシガシラ科 シシガシラ。
9. オシダ科 オニヤブソテツ、ヤブソテツ。
ヤマヤブソテツ、ヤマイタチシダ、オシダ、
ベニシダ、クマワラビ、トウゴクシダ、
オクマワラビ、ミウライノデ、イノデ。
10. ヒメシダ科 ミゾシダ、ゲジゲジシダ、
ハリガネワラビ、ヒメシダ。
11. イワデンダ科 イヌワラビ、ヤマイヌワラビ、
ヘビノネゴザ、ホソバシケシダ、シケシダ、
ミヤマシケシダ、クサソテツ、イヌガンソク、
コウヤワラビ。
12. ウラボシ科 マメヅタ。

種子植物**裸子植物**

13. マツ科 モミ、アカマツ、クロマツ。
14. スギ科 スギ。
15. ヒノキ科 イブキ、ハマハイビャクシン、ハイネズ。
16. イヌガヤ科 イヌガヤ。
17. イチイ科 カヤ。

被子植物**双子葉植物****離弁花類**

18. ヤナギ科 ヤマナラシ、バッコヤナギ、
キツネヤナギ。
19. カバノキ科 ハンノキ、イヌシデ。
20. ブナ科 クリ、クヌギ、カシワ、ミズナラ、
ウラジロガシ、コナラ。
21. ニレ科 エノキ、ケヤキ。
22. クワ科 ヒメコウゾ、ヤマグワ。
23. イラクサ科 ラセイタソウ、ヤブマオ、カテンソウ、
アオミズ。
24. タデ科 ハイミチヤナギ、ミチヤナギ、ハナタデ、
イタドリ、ミズヒキ、ヤナギタデ、
オオイヌタデ、イヌタデ、サナエタデ、
ミヅソバ、スイバ、ギシギシ、エゾノギシギシ。
25. ヤマゴボウ科 ヤマゴボウ。
26. ツルナ科 ツルナ。
27. スペリビュウ科 スペリビュウ。
28. ナデシコ科 オランダミナグサ、ミミナグサ、
フジナデシコ、エゾカワラナデシコ、

カワラナデシコ、オオヤマフスマ、ツメクサ、
ハマツメクサ、ウシハコベ、コハコベ、
ミドリハコベ。

29. アカザ科 ハマアカザ、シロザ、ケアリタソウ、
カワラアカザ。
30. ヒユ科 ヒナタイノコズチ、ヒカゲイノコズチ、
イヌビユ、アオビユ。
31. モクレン科 コブシ。
32. シキミ科 シキミ。
33. クスノキ科 オオバクロモジ、シロダモ、タブノキ。
34. キンポウゲ科 ボタンヅル、メボタンヅル、
センニンソウ、ウマノアシガタ、
ケキツネノボタン、タガラシ、アキカラマツ、
35. メギ科 メギ。
36. アケビ科 アケビ、ミツバアケビ。
37. ツヅラフジ科 アオツヅラフジ。
38. ドクダミ科 ドクダミ。
39. ツバキ科 ヤブツバキ、ヒサカキ。
40. オトギリソウ科 トモエソウ、オトギリソウ、
コケオトギリ。
41. ベンケイソウ科 アオノイワレンゲ、キリンソウ。
42. ユキノシタ科 トリアシショウマ、ウツギ、
ヤエウツギ、ユキノシタ。
43. トベラ科 トベラ。
44. バラ科 キンミズヒキ、ヒメキンミズヒキ、
ヤマブキショウマ、ヘビイチゴ、
ヤブヘビイチゴ、オオダイコンソウ、
ダイコンソウ、ズミ、ヒメヘビイチゴ、
キジムシロ、ミツバツチグリ、カツカ、
ウワミズザクラ、ウスゲヤマザクラ、
カスミザクラ、ヤマナシ、ノイバラ、ハマナス、
テリハノイバラ、ニガイチゴ、モミジイチゴ、
ナワシロイチゴ、カジイチゴ、ワレモコウ、
アズキナシ、ウラジロノキ、コゴメウツギ。
45. マメ科 ネムノキ、ヤブマメ、ヌスピトハギ、
ヤブハギ、ヤハズソウ、ハマエンドウ、
ヤマハギ、キハギ、メドハギ、ハイメドハギ、
マルバハギ、カワチハギ、ツクシハギ、
ネコハギ、ミヤコグサ、クズ、
オオバタンキリマメ、ハリエンジュ、
シロツメクサ、ツルフジバカマ、
ヤハズエンドウ、スズメノエンドウ、フジ、
46. カタバミ科 カタバミ、アカカタバミ、
エゾタチカタバミ。
47. フウロソウ科 ゲンノショウコ。
48. トウダイグサ科 エノキグサ、ハイニシキソウ、
トウダイグサ。
49. ミカン科 コクサギ、サンショウ、イヌザンショウ、

平成3年度 石巻市文化財調査報告

石巻市田代島の植物相と植物群落

佐々木 豊 (元文化財保護委員)
 石塚 和雄 (文化財保護委員)
 根本 智行 (石巻専修大学)

I. はじめに

田代島は、面積約2.7km²、旧北上川河口から約15kmの海上に浮かぶ離島で、石巻市では最も南にある。海岸段丘の発達した島で、最高点の標高は96.2mである。気候的には温暖でタブノキ林やクロマツ林などの暖温帯的な植物群落が発達し、石巻市域では独特な植物景観を持つ地域である。

この島の植物相と植物群落について、1975年ごろから佐々木が随時調査を続けてきた。今回、この長年の調査を一応まとめる意味で、石巻市文化財保護委員会としての調査を、1991年度に行った。これには佐々木の他に、石塚・根本が協力して、数回の実地調査と既存の資料の収集を行い、本報告を作成した。



図1. 田代島地形図

国土地理院発行 5万分の1地形図「網地島」による。

II. 田代島の植物相

田代島の植物相について報告したものに石巻市小学校教育研究会・理科研究会編「石巻市附近の生物 第一集 田代島植物の部」(1956年8月)があり、シダ植物以上90科383種が記録されている。

今回の調査では、維管束植物108科529種（品種・変種

も1種と数えて）を記録した。シダ植物12科37種、種子植物96科492種である。

同じ牡鹿半島域の離島では、面積約10km²の金華山島で700種あまり、面積約6.6km²の網地島で600種あまりの植物が知られているが、その面積からみて田代島の531種は決して少ない数ではない。今回の調査によって島の植物相のおおよそが明らかにされたのではないかと考えられる。

調査結果からみると、田代島の植物のはほとんどは石巻地方の低地でふつうにみられるものであるが、

1. 暖かい地方の植物が多いこと
2. 海岸性の植物が多いこと
3. 山地性の植物と日本海要素とされる植物がわずかではあるがみられることなどが特色としてあげられる。

なお、植物相の調査は長い時間を要するものであり、短時間で行われた今回の調査結果が完全なものでないことも確かである。今後も更に調査が続けられ、より正確な植物相が明らかになることを期待したい。

表1. 田代島に生育するシダ植物と種子植物

	科	種
シダ植物	12	37
裸子植物	5	9
被子植物	52	213
被子植物	24	138
被子植物	15	132
合計	96	492
総計	108	529

1. 植物目録

科の配列と植物名は、主として「日本の野生植物（平凡社、1981～1992）」により、学名は省略した。

石巻市文化財だより(第23号)

平成6年3月25日 印刷
平成6年3月30日 発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目1番1号
電話 (0225) 95-1111 内線 345

印刷：株式会社 鈴木印刷所
石巻市鶴田字新谷地前121
電話 (0225) 22-4101

